

niche (ニチ) ①像を納める脇子。②窓(ひつぎ) —広辞苑—

ニッチ (niche) (英 Niche) がん(窓)とも書かれる。壁体内に掘られた、多く平面半円、半円筒状で、上に半球をいただく凹所。彫像などを置く。 —ル・ブルジョア辞典—

niche(nich),n. [Fr. niche, from L. nidus, a nest.] 1. a recess or hollow in a wall, usually intended for a statue, bust, or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it. —Webster's New Twentieth Century Dictionary—

Fig. 5

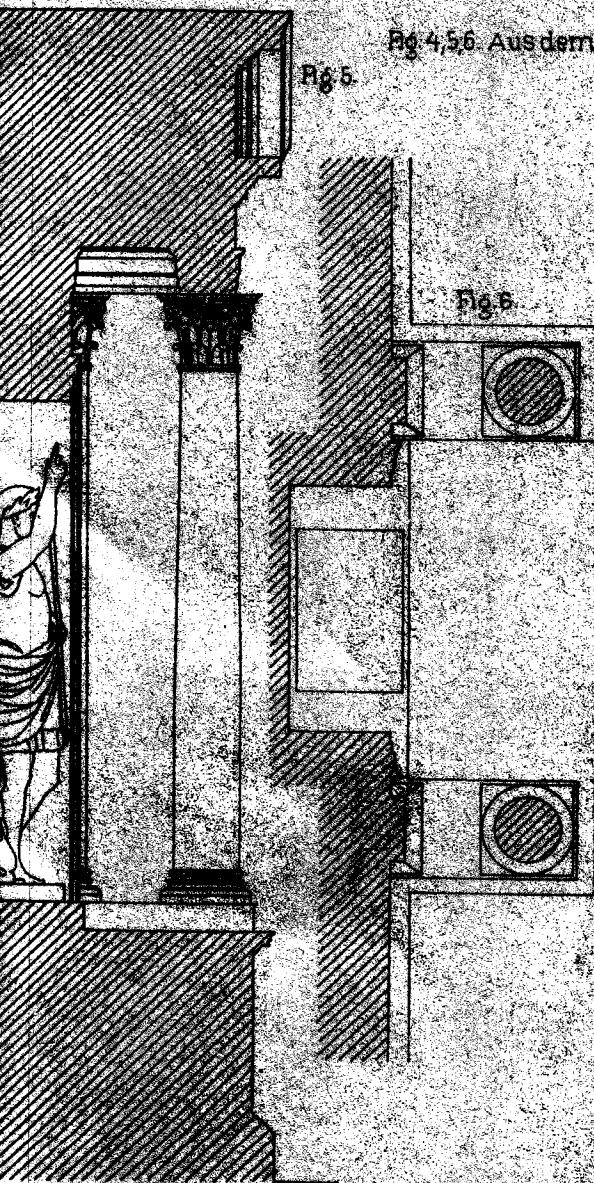


Fig. 4,5,6. Aus dem Pantheon in Rom.

Fig. 6

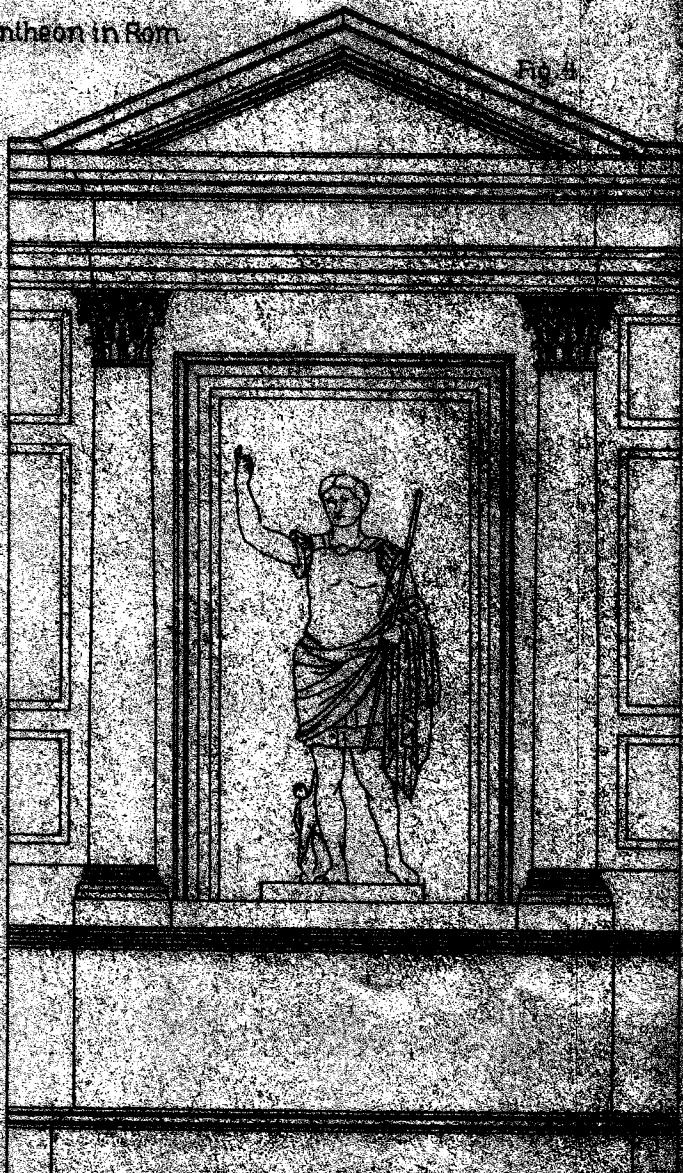


Fig. 4



工学院大学 建築学科 同窓会誌 5

◎目 次

○特集 座談会 建築に関わりあいがござんす	編集部企画 2
○劇場設備とその設計雑感	愛川和伸 12
○自作自演 MY SWEET-HOME	古山六男 14
○シリーズ『都市』3・月島	山下研卒論生 16
○琉球列島・飛び歩記	大場光博 24
○居住者としての私	黒沢秀行 32
○行動と検証	安原治機 35
○執筆者のプロフィール	37
○運営委員会報告・告知板	38
○会社リスト	40
○運営委員名簿	42

○発行日	1973年3月25日 每年1回発行
○発 行	工学院大学建築学科同窓会
○印刷所	株式会社 金羊社
○編集長	久野和作
○編集ブレーン	岡本宏平 久保昌也 久保史子
○表 帰	久野和作

○特集 座談会 建築に関わりあいがござんす!!

あいさつ 私は第二回卒業の小高です。

第一回の同窓会の会長をやらせていただきました。建築学科同窓会がスタートして、いろいろな細かい内容、その他のことがらを検討しながら皆さんにお図りして、段々に作り上げて大きくしてきたわけですけれども、そろそろ若い世代に移っていいんじゃないかということで会長やその他の役員の人選をしたんですがなかなかうまくいかなくて、その当時副会長であった金田さんが現在、会長となってやっているわけです。やはり最初作った人達が固まってしまって、なかなか斬新なものが打ち出せない。それで建築学科同窓会の会誌だけは全く新しい人達でということで、その後全く新しい人達にやってもらってからは、今までの同窓会誌とは全くスタイルを変えて大変ばらしいものができた。今回さらに大きく輪を広げて、卒業して十数年、多くの人達の交流を何とか図りたいというところからこういう座談会を持たれたんだと思います。こういう企画は、非常に意義のあることで、ある壁を破って皆さんとこういうコミュニケーションをできるということは、また新しい次への出発として貴重だと思います。今日の座談会に出席の皆さんのがテーマに沿いまして忌憚のないところをいろいろお話していただければ、それが会誌に発表され、同窓生の皆さんに読まれた時に、また新しい発展が望めるんじゃないかと思いますので、よろしくお願ひいたします。



小 高

司会 きょうはテーマとして「建築関わり談義」副題として「建築業として生き

ていくために」という題でいろいろの世代の人に集まっていた大いにいろんな意見を聞こうということで企画したわけです。最初に、最近建築関係の発展は目覚ましいものがあって、開発とかいろんなことが行われているけれども、一方で破壊とか公害とか、そういう社会問題として出てきている。政治の面では日本列島改造論とか、また住宅問題とか、自然破壊、日照公害、そういういろんな言葉が聞かれるわけなんですけれども、それに対する一般的な意見を、話のきっかけとして聞かせていただきたいと思います。



司会・久保

小材 私が現在携っている仕事たとえば日照権の問題とか、俗にいう建築公害の問題、そういうものに直接関係した設計をしているのが現状です。建築の根本は何かというようなことを話をする前に、現実の社会をどういう見つめ方をするかというのが一番基本になるし、私はそれなりに現在の仕事に対して相当抵抗は感じているけれどもこれはある程度やむを得ないんじゃないかという考え方を持っています。漠然とした話ですけれども、われわれ建築に携わる人には二つの考え方があると思うんです。一つは建築とは何か、居住性がどうのこうのということそれからもう一つは経済とか社会とか政治とかをからめて、現在の社会情勢の中での建築というものを考える、この二つを考えいかなくちゃいかんと思う。私はどちらかというと後者の方を現在握っているし、そういう立場にあるわけです。社会性を問題にするということでも二つに分かれますね。住民側に立てばこ

ういう考え方、体制の中にはいればこういう考え方と。どちらかといえば私は、社会の体制の中にはいって仕事をやっているがこれはやむを得ないんじゃないかという漠然とした考え方を持っている。だから建築というのはいちがいに人間性を重視する問題ではなくて、工業化とか流行——この流行というのは様式とかそういうことじゃなくて、現在の社会に即応した建築方式とか、もっとそういうことをわれわれは考えていかなくちゃいかんのじゃないかと思っています。

牛山 そういう意味からいとウチの会社も、また私自身も、そういった緑の破壊という仕事に携っているもんですから(笑) そういうことになると非常に心苦しいんです。そういった宅地造成設計の中で現実には自然の緑を破壊しているわけですけれども、できるだけ緑を取り入れたい。私もそうした破壊されたあとにできるだけ町の入居者、住民の一人という立場で、作り出される団地の中にできるだけ緑を再生産していきたいと心掛けた設計にあたっていますが、民間の営利企業ですから、やはり事業採算優先が大前提です。私自身そういうふうに心掛けてやっておりますし、最近は役所関係でもかなりいろいろな規制や行政指導で、一平方キロにあたり何本木を植えなさいとか、開発指導要綱が出されてきていますので、段々一住民としての設計ができるようになるんじゃないかと考えています。

牧野 環境に対する公害という観点から捕えていくことは非常にむずかしいし、また建築というのは結局、そういうものに対して相反する立場にある気がするんです。そういう問題を考えた場合、建築というのは作れば作るほどそういう方向を目指している気がします、自分自身にやめろといっても、今までやってきた関わり上やめられないようなところもありますが、僕自身環境という問題をいろいろ考えてるとときエネルギーという問題にぶち当たったんですけども、いまのエネルギーの利用の仕方だと完全に…

…。英国におこったの産業革命以来そのままエネルギーを利用してあとに廃棄物を捨てちゃうと地球がそのまま飲み込んでくれるだろうというが認識があるような気がするんです。考えてみると地球というのはもう完全に、それを処理できない状態に陥っていると思います。そのスケールはわれわれのスケールにまでも落ちてきていて、もっと身近なこととして考えていかなければいけないと思います。捨てるによって、そこに何か起こっていくような危機感をすごく感じる時がある。石油とか石炭とかその他のエネルギーを使う時に必ず廃棄物が出る。その廃棄物をいかに処理するかということにおいて、かなり社会的な問題になっています。そういうエネルギーを利用するという問題を何か別の方法で考え直さなければ、こういう状態でますます公害が広まっていきますし、自然が蘇生することはもう明らかにないだろうという気がします。ますます破壊の方へ手助けしていくようです。だからいま私自身そういう問題に対しては非常に無力ですし、自己嫌悪的な状態にあります。

塩谷 どういう話し方をしていいかわからりませんが、僕がいま一番興味を持っているのは、自分は何が一番やりたくて生きているのかということで、建築を考えれば、これからやればやるほど破壊に向っちゃうと思います。その段階で、じゃどうするかということがどうも抜けているんじゃないかなと思います。そのためにはちょっと忙がしすぎるということもあります。公害ということいろいろなものを批判するにしても、自分の生活から出てくる意見というのがあまりなくて、企業の人間としての意見とか、あとは政治がどうのこうのとか大きなレベルになって、どうしても個人というものから出発していないんで、その辺でいくらガタガタ言ったところで堂々めぐりになるだけで全然解決が出てきません。個人がどういうふうに生きるかということから出発すれば、日照権に関してはやはりマンションを建てる人に反対する。そうなれ

ば建築自体も、建てるのをあきらめなければなりません。建築家自身も、ものを作ることが建築ということでなくギブアップしてやめるということも建築を作る以前の段階ですでに勝負が決まるんじゃないかなという感じがします。僕は万博をやってあの中で六ヵ月いて、相当うじうじ暮らしていたんですが、その辺が一番僕としてはこたえているわけです。それ以後僕が目指していることというのには、自分自身がどう生きるかということとプロセスをどう考えるかに、一番興味があります。僕自身は建築というのをあまり作っていないんで質問に沿う返答はできませんが、僕自身、何をやるかを決める時の価値判断の基準は、その辺に置いていますね。

宮島 建築といつても、これはお客様が初めて初めて成り立つものなんです。だから僕等は何をするにしても、僕等の意思でやるわけじゃない。僕等が政治的ないろいろなことを考えるよりも、要求されたものを満足させてやることが、僕等の義務なんです。だから相手の要求に対して、それはまずいとかいうことを言うのは建築家として越権行為だと思います。建築というのは、皆の要求に対して作るもので、芸術家と建築家を間違えちゃまずいんだな。正直なことを言ってわれわれは芸術家じゃない。相手がどんなことを望んでいるかということに対して満足を与えてやるしかない。もしいろいろな問題があるなら、そういう要求を出さないで下さいということなんです。（笑い）要求を蹴ってビジネスが成立しますか。「私の家はこうして下さい」と言ってきますね。それに対して僕等は、アイデアを出して相手の満足するものを、専門家としていろいろ助言はするけれども、相手の要求を全部蹴ってご覧なさいよ。それじゃ金も出してくれませんよ。

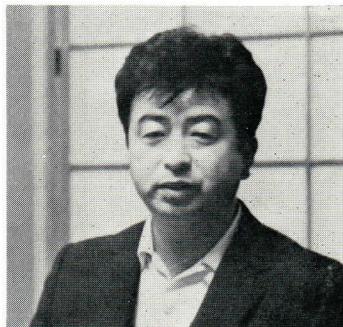
塩谷 その場合、ケースバイケースということを忘れちゃいけないと思います。芸術家じゃないけれども、人間であるということも忘れちゃいけない。

宮島 それは建築以前の問題です。

塩谷 要求されても断わるということも人間であればできるということも、やはり忘れちゃいけないと思います。

東方 僕は人間の世界みたいなものを見つめ直しているんですけども、地球の上に、みんな生きたいという個人的な欲求があってそれはどういう行為なのかを考えた時に地球上に何か汚点を残していくような作業で、一生を終わるんじゃないだろうか。個人的に黄色いシミとか紫のシミとか残していくんだけれども、それがトータルでどういうことになるのかというと、キャンバスに描かれた絵みたいなものになるんじゃないかなという気がしているんです。じゃ一体どういう絵が描ければいいかというと非常に漠然としていて、誰も、一枚の絵のトータルなどビジョンを出せない、また出しても意味ないというところだとと思うんです。どんな絵を描き、なぜ黄色なのかというところが抜け落ちていながら、一方では日本列島改造論みたいな非常に現実的なレベルでもって走っていて、皆なそっちへ目が向いてしまうけれども根本はどこにあるかというと、どんなシミを残していくかだけがあるんじゃないでしょうか。その辺で、じゃ僕が落とすシミだけは責任を取ろうということで勉強しいるんです。アルバイトで観光開発なんかやるんですけども、非常に部分的なレベルでしか計画をしていないようです。全体の計画がなくて部分的なレベルでいろいろやっていっても全然空論になってしまいます。

宮島 結局僕等の個人の考えじゃないで



宮島

○特集 座談会 建築に関わりあいがござんす!!

すよ。僕等は人がいろいろ要求を持ってきたものに対して、それをまとめる立場なんです。僕等に与えられたのは表現のテクニックだけなんです。

東方 でもそこには行為があるんですね。

宮島 それ以前に、要求してくるという相手の大きな意見がある。われわれが、頭の中で考えるのは自由だし、できます。しかし現実論としてはそれは不可能だ。

東方 それは要求を無視するということにはならないでしょう。



東 方

宮島 たとえばここに工業団地を作る、何と何を持ってくるということに対して、それじゃその企業に止めて下さいと僕等が要求できますか。

牧野 そういう個別の問題じゃなくて、なぜ工業団地がそこに必要であるかということについて考えなければならないわけでしょう。工業団地が必要でないと考えるならば止めることを説得しなければならないし、そういう方向に持っていくなければならないでしょう。



牧 野

宮島 それは建築以前の問題ですよ。

牧野 あなた自身の人格とか思想とか、そういうものをどういう具合にそこに加味していいかということですよ。あなた自身が手を下し、実際に作るわけです。それに対して自分の考えが全然はいっていないということは言えないわけです。要求だけで作るんじゃないなくて、当然そこに自分の考えがはいっている。

宮島 僕等は、要するに死刑の執行人で、死刑を決定するのは裁判官なんだ、僕等じゃない。

塩谷 死刑執行を拒否することはできる



わけでしょう。

塩 谷

宮島 その権限は与えられていないと、実際問題、そういう作業は不可能です。理想としてはあるけれども。

小材 それはやはり年齢の差、職業の差いろいろ出てくるんで、理想と現実の差というのは、ものすごいギャップがあるわけですね。いまわれわれは現実は現実として見なければいかんし、あくまでも理想は理想として持てないくちやいかんと思う。その辺は誰しも同じことだ



小 材

と思います。宮島さんの話は少し極論だという感じがしますね。

宮島 現実にタッチしていますから。僕等が執行人であるということは何としても間違いないの、厳然たる事実なんだ。

小材 身をもってそういう社会を体験していますから、そういう言葉が出てくるんだろうと思います。だけどわれわれはやっぱり一つの、決められた、押しつけられたという問題の中でいかに要求を満足してもらえるかという、その辺の主張はしなくちゃいかんし、遂に能動的な働きかけをする必要はある。はっきり言って、私だって企業のイヌみたいなもんですが、企業の中の一員としてこうやれと言われても、結局自分にはね返ってくることを考えれば、自分が相手に対していかに利益を与えたまた幸福になるように考えてやるかということが根本的な発想になると思うんです。自分が相手の立場になってやれば当然自分の企業は利益が上がるだろうし、名声も博せるだろうという発想になるわけです。そこに自分の要求も当然入れなければいかんし、相手の立場というものも考えて、それを押し出してやる。その辺をできるだけやろうという考え方は、僕は昔からもっています。単に受身じゃなくて逆に向こうの弱いところをつかんでやってそれを強くしてやるというやり方でやりたいし、そういうことが必要じゃないかと思います。

○われわれの立場

司会 宮島さんの自営する立場と、組織の一員としての小材さん、フリーな牧野さんの意見が出たんですが、塩谷さんは社会的なシステムの中でやられてこられていままたフリーな形でやられているわけですが、その辺はどうですか。

塩谷 どうも、価値観が一つしかないという話し方になっちゃっています。僕の場合組織というのは非常にこわいですね。万博で一番貴重な経験をしたのは何かといえば、ああいうくだらない組織の中でやらなければいけないということになると、最低限の約束を守らないと何も

できないわけです。その約束事を守って、いいのをやろうと思っても、その努力は最少限しか報われないということもあります。それで自己満足をして、何かちょっと新しいことをやったんだと満足しても、結局枳迦の手の中で、全然その外に出られない。やはり組織がやったということになっちゃう。その辺のジレンマというのはすごくあるわけです。たとえば建築家はものを作るだけで満足しちゃって、広場を作っても、あとで道路だということに決めちゃえば皆な追い出される。いまそういうことのくり返しです。僕ら自身も学校で教えていることも、広場であるし、作っちゃえば終わりだという意識でしか僕等自身は意識していないわけです。しかし使ったあとというのが本当の生活であって、それをどういうふうに考えるかという段階で僕等はどうも逃げているんじゃないかなと思うんです。僕自身はそういうところでうろちょろしているんですが、その時最後に残るのは自分自身であって、自分はどう考えるかということを忘れちゃまずいと思う。結果としては自分と全然関係ないところへ進んでも、素直に自分を振り返るような余裕がないと議論は議論で終わって、意味がないと思います。

司会 今までの話をまとめてみると市民個人としての立場という考え方と、宮島さんみたいに、与えられたものに対してわれわれは処理する担当者であるという立場と、もっとフリーな立場で、牧野さんみたいに、人間の生活をどうするかという立場があるんでそれを考えるきゃならんというニュアンスの立場、小材さんのように、宮島さんの意見と牧野さんの意見があるけれどもそのどっちかにわれわれは属しているから、その中でどう自分で処理するかという意見が出ていると思うんです。東方さんから先ほど宮島さんに向かってトータルな立場としてという意見が出たんですけども、それにに対する宮島さんの意見をお聞きしたい。

宮島 皆なの夢を碎くようで大変申し訳ないだけれども、自分達の与えられ

ている立場というものを正確に認識すると、われわれはあまり理想的なことは言えないような立場なんだね。

塩谷 やっぱり言っちゃいけないのかな。

宮島 考えることはいいんだよ。そこで進歩があるんだから。だけれども、実務にタッチする人間の実務処理としては不本意ながら、やらざるを得ない立場にあるわけです。それがいやだったらわれわれは建築家という立場を放棄して、それを是正する職業にタッチして、それで大いに建築に対して目を光させて、理想的なものを押しつけてくれればいいんだ。

司会 ということは、政治ラインに結びつかなければということですか。

宮島 現在の建築は、政治を切り離しては考えられないね。緑の復興、公害の問題と、すべての問題において。

塩谷 何が政治かということと、結局お金を持っている人が政治をするわけです。そう考えてみると、政治に首を突っ込む突っ込みないだけでなく、僕等がやっていることだって——同じことなんですよ。規則とかいうことで言っちゃうと政治ということになっちゃうけれども、その辺を少し掘り下げて考えていけば、何か見つかるんじゃないでしょうか。理想を言てもいいけれども、現実は現実として対処しなければならないと思います。

小材 理想といった時に、真の意味で何が理想かということと、現実をどれだけ踏まえるかということで、理想の価値は計れると思います。現実と理想が二元論的に語られているところがあつていやなんですねけれども、もっと現実を踏まえた上の理想があつていいと思いますね。

宮島 現実を無視して理想をいくら論じ合ったってしょうがないんだよな。僕等が実際にやっている建築というものを頭の中にたたき込んで、それじゃわれわれはこの中で何ができるんだということを考えなければならない。たとえば喫茶店のインテリアをやる場合、照明器具を取り付けるのに、丸がいいというのを、絶

対私は四角がいいといって通せますか？

塩谷 僕は簡単に丸にしますよ。デザインというのはそれほど重要じゃないですよ。

宮島 そこに誰が住んで誰が使うんだということを考えたら、自分の考えの四角になんかできませんよ。

東方 説得するということでなくて、なぜ丸なのかという話をしてもいい。

宮島 色にしてもそうでしょう。私は赤がいいと言っても、最終的に決めるのは注文者ですよ。そうしなければ金を払ってくれませんよ。

塩谷 僕が簡単に丸にすると言ったのは、デザインなんというのはとにかく千差万別で、どれがいいということはいえないのだから。それを公害問題において論ずる時と同じ価値判断じゃ、やっぱりおかしいですね。

宮島 その濃度を深くしたということであって、われわれにあてはまる方程式は何ら変わりない。恥ずかしくも何ともない。自分達の置かれている立場というのはそういうことなんだから。

塩谷 だから私は建築はやっていないですよ。(笑い)

宮島 ところが僕は建築で飯を食っているんだから仕方がない。文句があるなら建築をやめるしかないんだよ。

牧野 僕は理想論的なことで大分悪漢になっていますが、施主が言われた条件、要求に対して、全てそれを充たしてやらなければいけないとき、その要求を充たすために法規に違反しなければならないとするとどうしますか。もう一つは、要求や法規的な条件を充たしているが、日照権とか騒音とかで非常に迷惑をかける場合はどう考えますか。

宮島 そういうことはあり得ない。建築基準法と騒音規制法の全ての法規を充たしていれば、さらに周囲の人間に大きな損害を与えるということはない。現在周囲の人達が要求するものにまでは達していないかも知れないけれども。完全に無視されている法律だったら、最初に法律を直さなければいけない。

○特集 座談会 建築に関わりあいがござんす!!

牧野 現実にそういうことがあるわけです。道路に面しているものは高く建てられますが、中に面しているものは建てられないという法規があります。日陰という問題に対して実際に偏っている場合施主から要求があった場合建てるか建てないかということです。

宮島 そういう場合には建築家としての立場を放棄するしかない。あらゆる法令に対して充たされていれば放棄する資格も権利も持たない。違反しているものは正する義務はある。

牧野 是正するという時、どういう具合に考えるかということを僕は言っているわけです。

宮島 現実の要求というのはあらゆる法律を充たすような要求じゃない。それ以上のことを要求される時はいろいろ削って、法令に照らし合わせて、相手の要求をひん曲げても私の責任においてはここまでしかできませんという状態にまでしかもっていけないのが現実なんだよ。

司会 先ほどの塩谷さんの、作らないという立場も建築するという立場であるんだという言葉がそこで出てくると思うんですよ。

塩谷 それもむずかしいことで、法規さえ満足すれば建築は建てられるということは事実ですよね。日照権とか公害問題にしても、五十年前には全然なかった問題です。しかしいまは法律があって守らなければいけないですね。だからいま法律が完璧であっても、将来に新たな問題が起り得ると考えられた時、建築家は、人間に立ち返ってどういう方法をとるかということが、自分はどういうふうに生きるかということに密接にかかわってくるんじゃないですか。

宮島 建築というのは器なんだよ。その点で間違えちゃいけない。

われわれは、その中で行なわれる作業に対しての問題を云々するわけじゃないんだよ。われわれの作るのは、そこで生活する人達の器を作るだけなのだから、われわれは結局要求されたものを作らなくちゃいけないという現実を理解しなくち

ゃいけないよ。

小材 宮島さんの意見というのは、この中では僕が一番よくわかると思うし、そういう立場もある。(笑い)けれども建築というのはもっと大きなものだと思っています。

宮島 法隆寺作ってくれと言った人は建築家じゃない。それがいま非常に優れたものとして残ってきているわけなんだ。自分達は職人であるということを忘れちゃいけないと思うんだ。芸術家気取りになってしまったら大きな間違いだと思う。書類を作るにしても図面を描くにしても、日常の自分の行為を考えてご覧なさいよ。そういうことを全部無視しちゃって自分の理想論を言っても何の価値もないし、言ったあとで寂しさだけが残るだけだよ。本当の優れた建築家というものは、頼んだ人がどんなことを考えているか、何を求めているかということをよく理解して、その人の求めているものを作ってあげることだと思う。

牧野 生活しやすい空間というものは、職人的な技術のディティールがどうだこうだということで完結できないわけです。今までその人が生きてきた経験的な問題とか、建築に対する考え方とか、そういうことがはいってくるわけです。

宮島 ここで言いたいことは、建築家というのは自己主張あまりできない職業だ、極言すれば。

東方 それはそうです。

宮島 必ず発注者がある。完全なる自分の作品じゃないということ。彫刻家だったら全てが自分の作品だからどういう形にももっていくことができるけれども。

塩谷 逆に言えばそこが出発点であって、そこから話が始まっているわけなんですよ。建築家だって河原乞食で、お金持がいなければ建てられない。その辺から今度また一つ一つ、問題が出てくるんじゃないかなと思います。

司会 潜在的要件というのは相手が何を考えているかということですが、それに對して理解し答えるのがわれわれの立場だという宮島さんの意見だと思うんで

す。創造する立場の全てであるのかという疑問は当然一方ではあると思うんですけれども、その辺についてはどうですか。

宮島 建築というのはそんな、いまあなたが言ったような言葉で表現されるものじゃない。もっと泥臭いもっと現実的なものだ。

司会 潜在的という場合に、個人的潜在と一般的潜在とかがあると思います。それをどういうふうに考えるかということを話してほしいんですけども。

牧野 僕は一般的潜在意識ということを具体的に話しますと、対人間の問題であるということがベースになっていると思うんです。個人的潜在要素というのは、その人がいかに住宅というものに対して考えを持って——住みたいかとかいろいろあると思うんです。そういう時点でわれわれはその人の考え方というものを汲んでやつて、具体的な色とか問題を現実的な意味でアドバイスはできると思う。そういうものは施主がこういう色だと言うならそれでもいい。だけれども建築家というものはその前に、個人的潜在意識というものを高めてやらなければいけないと、僕は思います。

牛山 会社へはいって五年の間ガムシャラにやってきた。ほとんど縁をつぶしていく仕事に対して、自分自身歎きししながらそういう設計をやってきたわけなんです。具体的には、大阪で二十万坪くらいの土地の造成計画をやっていますが、そこで先ほど宮島さんが言われたお客様がいる、当然そこに要求があるわけですが、利益がどのくらい、工期がどのくらいということで、あとは設計者である私にまかされているわけです。縁をどう残そうと、どう道路を通そうと、あるいは道路を全然通さないこともできる。お客様から要求されたものは全体計画からいけばかなりのウエートを占めていますけれども、ある一部でもあるわけです。それを満足させさればあとは私自身が設計して説得というか説明すれば、私自身がやりたい設計はできるわけ

す。私はそういうふうに自分自身を納得させながら、進めているわけですし、私の置かれた立場の基本姿勢です。

それにもう一つ、われわれが設計をやった宅地をお客さんが買うわけですね。選択権というのはお客さんにあるのかもしれないけれども、それ以前に入居者の代弁者として、一設計者の立場があるんじゃないかなと思う。

小材 牛山さんが言ったのは、一つの企業の中での設計をやっていく方法だと思います。それをお客さんに使ってもらうための一つの方法だと思う。僕なんかも同じようなことをやっているわけです。こちらから逆に最大公約数を取って与えるわけです。それはプランが悪いというのとは、はっきり言って別なんです。いいとか悪いとかは個人によって考え方方が違うと思う。さっきも言った四角と丸と同じことで、これはよければ使えばいいんだし、悪ければ捨てればいい。企業のやり方というのは、こういうような考え方方が主流を占めていると思います。

司会 次の話題にはいる前に実務家宮島さんと実務の傾向の強い牛山さん、小材さんとかの意見を聞きたいと思うんです。

小材 現在置かれている境遇とか、そういうことであれば言えると思うんですけども具体的にじゃどうも……。

宮島 現在自分が置かれている立場だと思うんだ。美化したり理想化して表現したって意味ないよ。

小材 私のやっている仕事を通じて自分の考え方を話します。先ほども言ったように、ウチの会社はマンションを企画、設計、施工、販売、ここまで一連のラインに乗せて仕事をやっている会社です。私は現在図面は描いていません。どっちかというと施主との折衝、それから図面チェックそういう仕事をやっています。私の考える建築というのは、先ほどからも話が出たように、企業を表看板にした建築の考え方ということが言えると思うんです。要するに建築というものは相手

に対して与えるものであって、向こうのものを請負うという考え方方はもう、ちょっと時代的には古いんじゃないかという考え方です。いい悪いは相手が決めることがあるという基本方針で、いまやっています。建築というものは究極的に考えれば、プランの良し悪しそれ以上に、現在の社会の複雑な構造の中でもっとほかの大きな要素があるんじゃないかなと思います。企業のメリットを生かして進めるこことによって安くいいものができれば、これは一番いいことだと思う。基本的にはそういう考え方でやっています。飛躍するけれども、私のところにいる設計屋さんは俗にマンガ屋さんと言われます。僕はマンガ屋さんと言われるとカッとなるが、はっきり言って設計屋なんというのは、他の人から見ればマンガ屋さんだ。建ちもしないものを描いているということです。そういう人が一応20人ばかりいるわけですけれども、その人たちは学校を出てきたときには、やはり理想を掲げてきた、と思うのです。体制の中にはいってきて、自分の理想をできるだけ入れながらやるということは変わらないけれども、それがほとんど入れられない状態です。事実、相当不安不満はあるだろうと思います。先ほども誰か言ったように、相手に説得できるようなものを一つは持っていくなくちゃいけないと思います。その積み重ねが自分を主張する建築家の立場じゃないでしょうか。私は建築というものはもっと厳しいものだということを話したいのです。

○組織のなかで

司会 ひと言聞きたいのは、組織の一員という肩書と、組織を動かす立場にもし自分が立ったらという立場で何か言ってほしいんですが、組織の一員だということは、個人的にはフリーな立場を取り得るかもしれない。ところが組織の当事者だという立場にもし立たされたらということを考える場合には自分はどう対処するかということが、もし考えられるならば話して下さい。

小材 むずかしいと思うんですが、さっ

き宮島さんがおっしゃったような考え方僕は偏っていると思うんです。

牛山 先ほどもちょっと話した宅地開発のプランが、そろそろでき上がる時期になってきたわけです。3年、4年たって、現実に自分自身がそこへ行ってみてかなりの後悔はありますね。どういう後悔かというと、素晴らしい線をつぶしたということ。その半面、その中にもう一度線を戻そうじゃないかという努力はやってきたつもりなんです。いま考えていることは、これは会社の問題だからちょっとまづいかもしれないんですが、先ほどのプランの件ですが、あるいは大阪府の自然公園になるかもしれない。私が見た限りでは素晴らしい線と水がある。できることなら私もそこは公園にしたい。先に言ったのが企業の中の私であって、あの公園にしたいというのは僕自身の個人の考えですね。

○建築に何を求めるか

司会 建築をやっている段階で、究極的目的というか喜びというか、何をやっているからおもしろいのかというようなことをお聞きしたいと思います。

小材 はっきり言って、現在おもしろ味というのはないんですね。まず生活をするという一つの手立て。究極に建築をこのまま進めていったらどうなるのか、自分がどうなるのか、こういう動き方をしていくとどうなるのかという疑問は持っていますね。俗に言う建築家とか建築屋さんというような動き方は私もしていないし、理想はあるけれども、理想と現実とはちょっと離れてますね……。

やっぱり建築というのは何かというとなんだろうけれども、その辺がいまわからぬ。建築というのは大きいもんで、図面は描かないにしてもその一部に携っているわけです。自分の意見は当然反映していると思うんで、一応はやっているなという気はするけれども、現状では、最終的にはそれが生活の糧の一部でしかないような気がする。もっと突っ込みはしなくちゃいかんと思うけれども、足りないと思う。

○特集 座談会 建築に関わりあいがござんす!!

司会 卒業されてから何年目ですか。

小材 年目になるかな。理想と現実のうち精々現実の方が幅をきかしてきちゃうという感じだね。

東方 僕は余り建築というの頭に持ってきてません。とにかくテメエが常に瞬間瞬間に変わっていくんだけれども、何を感じて、そこから何か自分なりに納得できるものを、言葉にするか、音にするか叫びにするか、というプロセスが常に問題になっているみたいです。——その中でも建築に関わっている部分というのも多いんだけれども、全部そういう言葉で言っちゃった方がいいような感じがするんです。だから建築というレッテルは余り意識していません。

司会 建築に携っているのは仮の姿としてもいいということですか

東方 結局、全部仮の姿であるということです。

牛山 先ほども話したんだけれども、いまやっている仕事を否定するすればやはり、そういった組織に身を置くことがおかしなことになりますから、先ほどただかおっしゃっておったですけれども、自分が与えられた範囲内でどれだけ抵抗できるかということですね、設計者として。

司会 その辺にやりがいがあるということですか。

牛山 まだ何とも言えないんですけどね。そういった組織の中で波をかぶって、溺れそうになってみたり、浮いたり沈んだりしながらまだまだこれから見定めていくという段階ですね。

司会 自分の意思を実現するということのおもしろさが、組織の意図と個人的な意図とのぶつけ合いでからみ合うところがおもしろいということですか？

牛山 それがおもしろいかやりがいがあるということはちょっと。その辺は表現ににくいんだけれども。

司会 自分のエネルギーになるところはありますか。

牛山 設計者として、自分自身が一住民の立場になって設計に取り組むということで、別におもしろいとかやりがいがあるとかいうことについては、僕自身も後ろを振り向く余裕もなかったもんですからまだわかりません。

宮島 僕の自慢は、人の設計したものを見まで施工したことがないということですね。全部、設計から施工の最後まで自分の手でやっているということです。長いになると話が出てから実際に実現するまで三年くらいかかります。しかし、その間、現実的な苦労がありますけれども、でき上がったときには、「やったなあ」という気持ですね。

小材 それはやはり共通した意見じゃないですかね。良かれ悪しかれ結果が出るということは……。

司会 もし設計と施工が違ったらどうですが。

宮島 絶対に僕はやりません。自分の作品以外は作りません。うれしいと思った

のは、今までその家族は非常に病人が多かったんです。僕が設計をたのまれて家を作つてあげてから、その家族が非常に健康的で明るくなったというんですね。それに私は住宅に対して基本的な考え方をもっています。

司会 その基本的な姿はどこから来ているのかというのはありますか。

宮島 天野太郎先生の影響だね。クリスチャニアだよ。(笑い)あれが何としても大きな影響力を持っていますね。クリスチャニアなんというのはスキーの滑走方法だね、一つの流動性というね。

司会 天野太郎の言葉に真実があったからということですね。

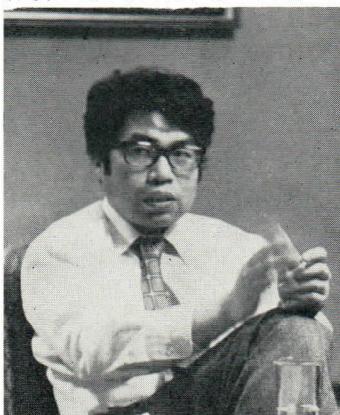
宮島 そうです。結局僕等の現在作るものは、どこへ行ってもあの先生がものすごい影響力を持っています。

司会 牧野さん、実際の建築に携つてのやりがい、おもしろさというのはどうですか。

牧野 自分自身のすべての行動のプロセスというものを非常に大切にしたいという考え方だけですね。

司会 姿勢と、実際にやってみての問題というのは、お若いからいろいろあると思うんですが、その辺はどうですか。

牧野 僕は工業高校を出て、夜学を出て、七年間実務をやって、あらゆる体験をしてきましたから、それなりの現実的な矛盾というものばかり体験したつもりです。だけれども、その中で自分が学んできたものというのは、人間というも



小 材



牛 山



東 方

のは大切にしなければいけない。自分自身がやっているプロセスというものを大切にして、ウソを極力少なくしながらやっていかなければいけなんだということです。

塩谷 僕自身一番何をやりたい勢というのいまもってわからないわけです。逆に言えば、いろんなことをやりたいという欲望があるのかもしれません。だからあるときは仲間とグループを作ってサウンズコンサートを開いたり、イベントをやってみたり、いろんなレジャー施設のマスターープランの企画をやってみたりしているのです。

司会 建築からもフリーであるという立場ですね。

塩谷 僕自身は、一番やりたいことをやりたいということです。その辺をまだ模索しているし、実際やってみてやはり向かないとなると、何が僕にとって一番確実であるかということだったら、建築に戻るかもしれないし。それと逆にもう一つ、割と組織の上の方と付合う機会が多いんでそこで感じることは、いかにしてその組織にもぐり込んで、逆に言えば建築のレベルに落ちる前の段階で組織と併んでやってみようかということを、少しずつやってみている。やはりそこと人の付合いということが相当しんどいわけで、最近逃げたくなることもあります。もしかしたらカナダへ行って野菜を作っているのが一番いいのかもしれないですね。それと僕自身いますごく危機感

を持っています。というのは、僕等の生きている間に地球最後がわかったという感じがあるわけ。だからなまやさしいことでやっていたんじゃもちろんダメだし、逆に言えば、そういうようなことを言っていたんじゃ何も作れなくなっちゃうような気もするし、どっちを採るかわからないけれども、その時その時が適当にして通っているところが多分にありますね。

司会 最初に司会の切り出しとして社会問題というような傾向を取って切り出したわけですけれども、現実の生活を通じての喜びとかおもしろさとか、おそらく実際に生活しておられる方は、それとは質的に違う形でそういうものがあるんじゃないかと予想するわけです。もしそういうものがあったら話してほしいんです。
宮島 やっぱり、ものを作る喜びというのは誰よりも強いんじゃないかな。僕等は無から有を生ずるんだからね。最高の自分達の喜びだと思うね。一つの作品を作ったところで多くの隣人に知り合える。友達に会えるということ。そうして必ずそこに親しい人達ができる。その周囲の人達といろんなコミュニケーションを持つために、親しくなる、ということだ。建築の場合はものを生み出す前から人ととの結びつきを持っていて、いろいろなことがあって、最後に一つの製品が生まれるわけです。そういうことで、作ったなという気がしますね。

司会 若い世代として東方さんは、そ

ういう社会問題と離れた形で、いまの建築に携ってみてどういう感じをお持ちですか。

東方 さっき言ったこととちょっと関連するだけれども、学生だからたとえば課題ということで具体例をとりますと課題をテメエに出されて、それをどういうふうに感じ取ったか、その感じをどれだけ自分なりに表現できたかというようなところが、納得できた形でできたときに一番うれしいし、そういう喜びの追及みたいなものがありますね。

塩谷 僕はさっき言ったことに尽きちゃうみたいで、何を言っていいかわかりません。

司会 最初の司会の運び方が社会問題からはじめていったわけなんですけれども、そういう問題とは別に、建築をやってみておもしろいとかいうこともあるんじゃないかと思うんですが。

塩谷 おもしろいことがないことはない。ただおもしろいからといってそれで終わりじゃないというあたりがいつも引っかかるっていうという感じです。僕自身は建築に対して幻想はなくなったかな。ライトもいいけれども、やはり違うんだという感じがあります。現在やはり全然違う時代にはいっていると思いますし、その辺で遂に、じゃそれは何かと自分で探してゆくことが逆に言えば一番好きなことをやっているのかもしかれないんじゃないでしょうか。僕自身は理想というのは別にありません。いま言っているこ



塩谷



牧野



宮島

○特集 座談会 建築に関わりあいがござんす!!

ともやっていることもすべて現実的なことであるし、社会的なことでもあるし個人的なことでもある。さっきすごく理想とか現実にこだわったけれども、そういうこだわり方は僕自身はない。だからあまりおもしろくないね。(笑い)

○学生時代と現在

司会 次の話として、学生時代と現在の心境の違いを一言ずついってほしいんです。

東方 僕は学校へ逃げ帰ってきました。だからいままだ学生時代なんです。自分の感じることを素直にしていくこと。それから素直に感じ取ることというものは絶対なやめない、ということです。

宮島 僕は学生時代から社会人だったから全く変わらない。一貫しているね。

塩谷 僕は価値観が全く、180度変りました。逆に言えば、それだけ価値観のキャラクターがふえたんじゃないかなといふ気がします。だから何というか、逆に定まらない感じですね。

司会 実際の学校とか学生の状態に対しては何もないですか。学校教育とか、現実の教育の問題とか、学生の姿もいいががすが。

塩谷 僕は教育にはすごく大事な点が抜けているという気がします。それはたとえば自分が何を考えるかという教育がほとんどないわけね。価値観は多様であって、イエスの場合もノーの場合も両面あるわけね。いわゆる、いろんな価値観があるよという考え方をしていないのが、学校教育の一番の欠陥じゃないかと思う。建築家がコミュニケーションと言っても、あくまでデザイン論でしか言っていないと思うんですよ。コミュニケーションとは何かといったら、とにかく人と人と話してディフォルマイズされたものがコミュニケーションだとか、コミュニケーションの施設は何かといったら市民ホールだとか、そういう形で表現しようとするところが、変に他を切り捨てるようなまずい点を生むんじゃないかなと思います。

司会 牧野さんは学生時代の延長でしょ



うけれども、前の段階の学生時代と現在とはどうですか。あるいは将来予想される、自分が実務についてからのことは。

牧野 最初僕自身がたどった経過において、実務についていろいろ考えたとき、いまの建築というものに対して「何か違うんじゃないか」と思いました。出てきた結果だと、いろんな要求だと力を入れてやっと、それに対して充たされればいいんだという状況が、すごくあったわけです。それに対してどっか違うんじゃないかなといふ気がして、他に何かあるんじゃないかなということで大学に入り、自分がかせいでのっている。その考え方というのはどんどん広がってきているわけです。いろんな連中が言ってきて——先ほど言われたようにコミュニケーションがどうということに対して僕自身もあまり信用していないし、いろんな人に「コミュニケーションとはどうなのか」と聞いても満足のいく答は返ってこない。自分自身、考えてみてもないわけです。そういう一つの、建築のボキャブラリーに関しては、頭から嫌気がさしている。実務をやりながらも矛盾するものがあるんだけれども、できるだけそれを是正していくという考えています。いまそれをやっていかなければ食っていけないから、ある程度の馴れ合い的なものもあるんだけれども、そういうものを極力少な

くしていかなければいけないと考えています。大学の中でも、僕なんかがいま受けている建築教育というのはどっかおかしいんじゃないかなと感じながら、それに對してある程度の意見を持っています。建築だけの建築という考え方じゃなくともっと目を広げた時点でなさなければならないと思います。——建築教育の考え方というものは絶対価値観的な考え方がありにも強すぎるわけですね。幾重にも答としてはあるのに、今まで建築家が作ってきたものはこうであったからこういう方向で進まなければならないという考え方がある。そういうことが自分自身でまともに信じられないし、そういうものは、崩す必要があるんじゃないかなという感じがする。

牛山 僕も会社で置かれた立場が土木的な関係で、不本意な立場に置かれている。大学時代にいろいろデスクッションあるいは考えていた分野でないセクションにいるんで、大学時代と現実の仕事とはやはり比較できないと思う。その中でもやっぱり、造成というのは屋外空間として建築と切り離すことはできないだろうと思います。学生時代との比較というと私の場合非常にむずかしいんで、全然また別個な立場に立ってそういうランドスケープアーキテクチャーミたいな分野に目を向けていきたい。先ほど塩谷さん

が言わされたように、広場として設計者が作ったものが、車が通って道路になっちゃうということがあり、屋外空間を設計するにしても設計者としてのマスターべーションが多いんじゃないかと思う。そういうところも冷静に見つめながら…。

司会 牛山さんの場合には、学生時代に考えていたことの延長の中に可能性を見出したということですか。

牛山 そうですね。

小材 私は学生時代は概して好きなことをある一つの考え方でやってきたんだけれども、卒業するときにやっぱり、自分で自由自在に動ける方向——これは設計者とかそういうことでなくて、自分の力を何とか発揮できるそういうところがほしいということで、そこにはいったわけです。結果的には、設計とか建築というものは社会の中のほんの一部の現象だと思います。だから、もっと広い意味で社会勉強をするんだという考え方でいます。学生のときの理想とかそういうものは全部置いてきちゃった。ただ、いま現在の理想というものは別にあると思うんです。学生時代のものとは違うが、希望もある。現在は、何にしろ社会勉強をする時期ではないかという考え方です。さっ

き大学教育とか建築教育ということを皆さんも言ったけれども、教育なんといいうのははっきり言って、僕はあまり期待する必要はないと思います。相当反論はあるかもしれないけれども僕はやはり、その人の考え方とか進み方というものがはっきりしていれば別に大学を出る必要もないと思います。それでも建築家には僕はなれると思います。大学の建築教育が、先ほども言ったように、どっちかというとデザインがどうのとか作品がどうというところ——現在はどうか知らんけれども、まだまだあると思うんです。そういうところ以上にもっと社会的な問題を捕まえて建築を考える必要があるんじゃないかな。そのためには、細かなデザイン論とかそういうものはとるに足りないと思うんです。現状の社会の中では、それではやはり自分が作っていくもんであるから、実際に社会にはいっていってどういう考え方をするかということは自分で選択する以外にない。

司会 もうひと言、自分が建築をやってよかったとか、そういうことで感じていることがもしあったら言って下さい。

宮島 僕には、建築以外に自分の力を發揮できる仕事はなかったと思いますね。

塩谷 クエスチョンマークですね。

牧野 そういう質問はおかしいじゃないかなという気がする。

牛山 まだそういう結論は出ていないですね。

小材 そういう結論はまだ出ていませんね。

要するにいま、社会勉強ができるつつあるということです。

司会 そういうことで、きょうは各方面、各世代からの卒業生の皆さんに集まっていただき、いろんな意見を聞かせていただきました。本当にありがとうございました。これからまたこういう座談会も持つことがあると思いますので、将来につなぎたいと思います。(拍手)

— 完 —

企画・編集部

○出席者

宮島 隆則（宮島建設）	S. 34年卒
小材 雄英（長谷川工務店）	S. 37年卒
塩谷 光吉（オズ・アンド）	S. 43年大学院卒
牛山 克（大成プレハブ）	S. 43年卒
東方 英雄（大学院在学）	S. 45年卒
牧野 利行（専攻科在学）	S. 47年卒

○司会

久保 昌也（増沢建築設計事務所） S. 45年大学院卒

○速記

小粥 豊（毎日新聞）

劇場設備とその設計雑感

愛川和伸 (40年卒)

■はじめに

私は7年前に学校を卒業してから、1つの会社を経て後、舞台設備会社に知人があり、入社して5年になります。この会社は親方日の丸的会社でして、受注の90%以上のものが地方自治体、国等の劇場公会堂等の舞台内に設備される昇降装置、常設大道具、音響、照明等の設計施工であります。舞台設備は特に可動である点がおもしろくて、この仕事に取り組んでおります。

舞台設備の施工会社としては中堅所として全国に得意先があり、企画設計を工事に声がかかるので、その都度地方の都市を考られるのが楽しみです。

■韓国における建設のようす

昨年は、舞台設備の工事で韓国に行く機会を得て、韓国々立劇場の舞台設備を作つて来ました。韓国には今もって行なわれている戒厳令等による集会の禁止と、文化のおくれ（経済産業の立おくれ）から来る、それらしい文化の育成基盤がない事等もあって、国内に見られる様な会館の建設ブームは見られません。首都ソウルには800万の人口があるが多目的ホール等の会館、劇場は建設中のものも含めてやっと3館にすぎないそうです。会館の建設計画はあっても依る所の資金難という所でしょうか。

文化程度と工業の進歩は一致せず、韓国々立劇場の現場では着工より3年を経ても建具が入らず、建具の取付後ガラスの予算がまだないというような状況でした。劇場内の間仕切壁は練瓦積みなのだが、現場へダンプで練瓦を落すとこれが5%程割れてしまう、そして1階から各階へ搬入するには、ちげという背負子に10枚ぐらい積み重ねて持つて行く。降ろす時には背負子を体ごと一方に傾むけてふり落す、とこの内の1、2枚が又割れる。割れたのを背負って降ろす。モルタルの砂も同様で、クレーンとか滑車ロープを使った仕掛け全々使わないというのんびり振りでした。

従つて舞台の工事なんて何の事やらさっぱり分らず、それでも40才以上の人は何とか日本語を知っているのだが、専門用語になると手真似、足真似で理解してもらう様な状態でした。韓国の建設産業には、機械力に依る生産性向上前の問題が山積しているのではないかと思いました。

■劇場設備について

舞台設備の仕事をしていると自然劇場の諸要素に関心が深まります。特に日本では多目的ホール作りに専念している地方自治体ばかりでして、今後3ヶ年間に作られる会館等は80件以上企画され、予算化される見通しです。

多目的ホールは演奏会、演劇、式典、公演会等に利用さ



韓国国立劇の建設現場



臨時宿舎に使ったタワー・ホテル19階建

れません。北欧ではコンサートホールで良いのが多数建設されている様です。コンサートホールは音響特性を残響2秒を理想としますが、北欧のそれは100Hz～4,000Hzで1.8～2.0秒、4,000Hz～8,000Hzで1.2～1.8秒です。国内のホールは、日比谷公会堂と各地年金会館、大阪の中野島公会堂、万博時の鉄鋼館、横浜音楽堂、高崎音楽堂が、比較的音響的に良いという事で使用に当てられていますが、100Hz～4,000Hz迄は良いとしても、4,000Hz～8,000Hz間では、0.8～1.2秒程度とされており、はなはだしく異なるのです。

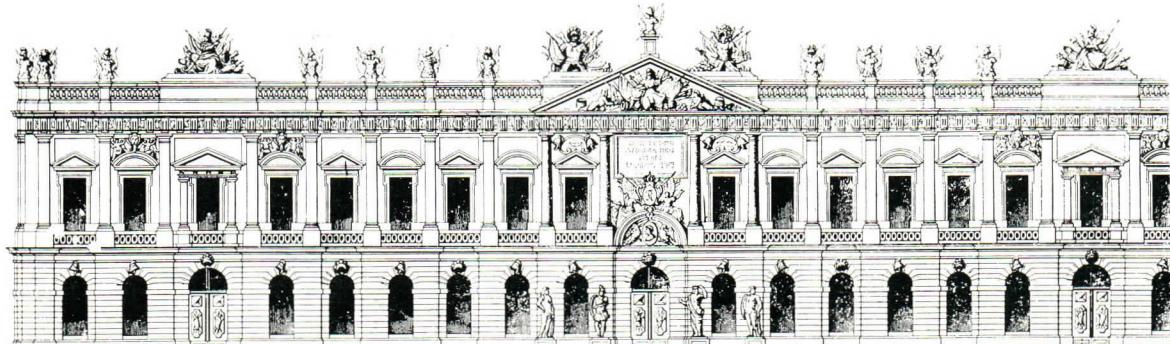
音楽は人間形成の上で情緒の発達に大きく左右するものでありますのでぜひ良いコンサートホールが出来る様に願わざにはいられません。又私共は良い物を作る事は課せられた義務とも思うのです。

この事は海外からの一流演奏家来日公演を良く聞くための我国の演出である様にも思うのです。

■おわりに

多目的ホールには舞台常設設備として大小道具、機構、音響、照明、幕類がありますが、これらの設計施工を担う建築業者には相当な負担であると思われます。これらの物事を仕様書に作成出来る技術者は極く特定の人々に限られています。まして地方自治体のこれから新設される市民会館等の舞台設備管理者及び、仕様書を理解出来る技術者は皆無に等しい程です。そこでこれ等関係者は、県民会館等に技術的アドバイスを求めるとか、関係業者に仕様書のひな型を作ってもらうとかして、学習研究するのですが、御苦労が多い様です。そこで私共劇場技術協会員は、力を結集し、用語集を作るべく、努力中です。建築学会の劇場小委員会でも、かなりの資料を持って、劇場設備の標準化に力を入れてもらっている様です。

動く装置に興味を持ったばかりに、この様な業界に入った自分を不思議と思いながらも、あすの市民会館が良いものになる様にと願う日々を過しております。



自演自作

MY SWEET-HOME

古山六男 (43年卒)

●施主 夫・建築事務所勤務、26才、妻23才 (当時)

●所在地 東京・保谷市住吉町

●工事期間 1971年7月～11月

●主体構造 木造

●敷地面積 168m² (借地)

●延床面積 76.4m²

●建設費 389万円 (自己資金130万円、借金250万円)

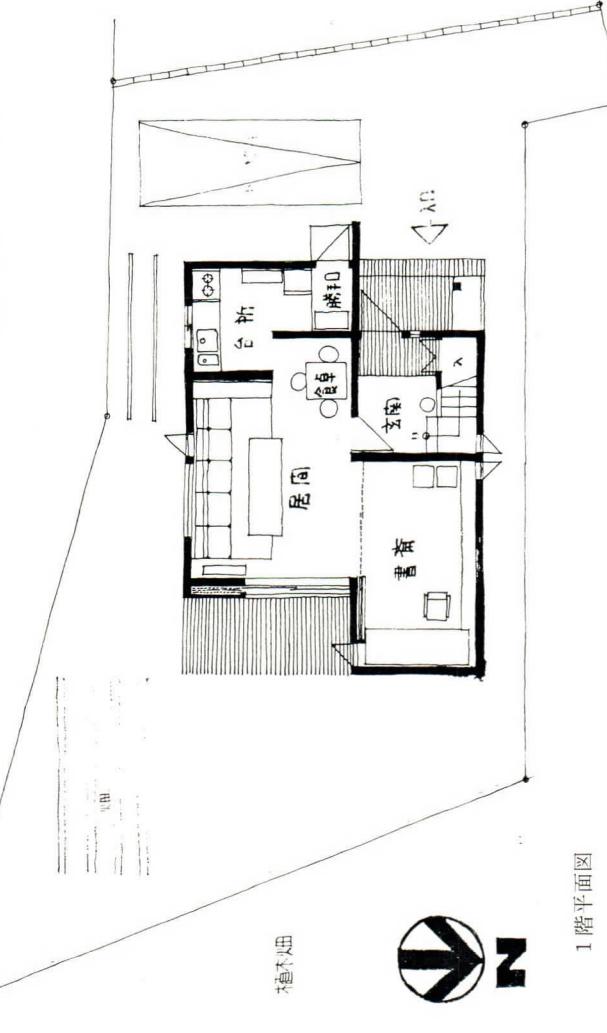
●仕上材料 屋根: カラー鉄板瓦棒葺、外装: 彫板O.P.S
スリ、内装: カベ天井共ラワン合板貼一部コソ
クリートプロック化粧積V.P.Sリ

●スタイル カルフォルニアスタイル (当時の好みと)、ロ
ーロストにおさえたため)

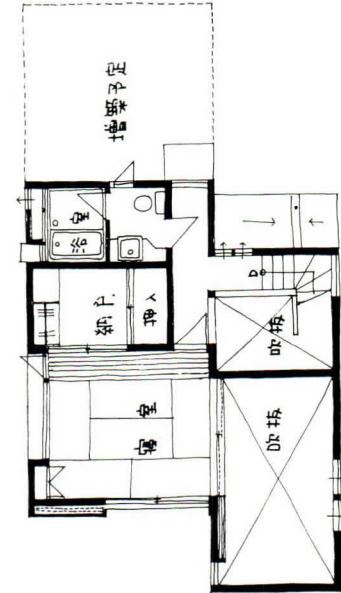
●環境条件 袋小路の奥にあるこの敷地は道端にわずか2
mしか接していないが南側は妻畑、東側は植木
畑に接し、今のところは環境良好、将来それら
は自分の敷地でないために不明である。

●空間構成

1階に居間を中心とするパリックなスペースと、2階に寝室を中心とするプライベートなスペースとに分け、相互の空間を吹抜によって
繋ぎ合せて“家”としての一体性をもたらせる。
空間を大きな仕切によつて、開閉することでき
間の性格や空間の密度が生活と融合し変化させ
る。将来は2階西側に個室を増築の予定。



1階平面図

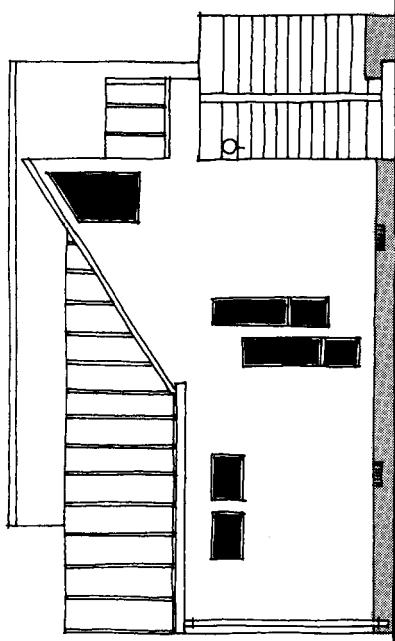


2階平面図

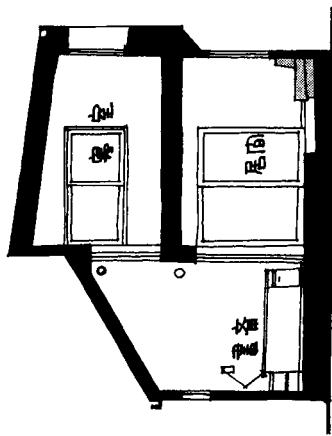
●施工過程

借入金のあてもつき、いろいろ条件をまとめて、スケッチに入り、大工さん探しを始めるところ、自分たちの結婚式場も見つけなくてわからぬい時期だったため、忙がしい毎日だった。やっと、こちらの希望の予算で請負ってくれる大工さんが見つかり、図面を仕上げて打合せをしてみると、図面に対しての我々の考え方と、大工さんの考え方とでは大きな差があることに気がついたが、「あとつまり」、結婚式には間に合わせなければならない住宅を始めて手がける私としては、最初からつまずいてしまった。結果として梁のかけ方などで、大工さん方式を取らざるを得なくなつたところが少くない。形が出来あがつくるにつれディーテール等についても予算の関係とかで自分自身の家であることと、人の良いのも手伝って、だいぶ妥協してしまつたところは後悔先に立たず、建築設計を仕事とするものとして非常に残念だった。しかし完成に近づくと、空間やディテールの不満も自分の家がもてるという実感であり気にならなくなる。

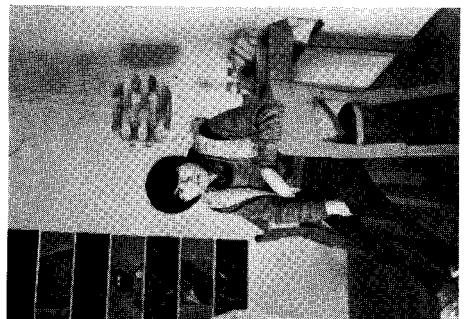
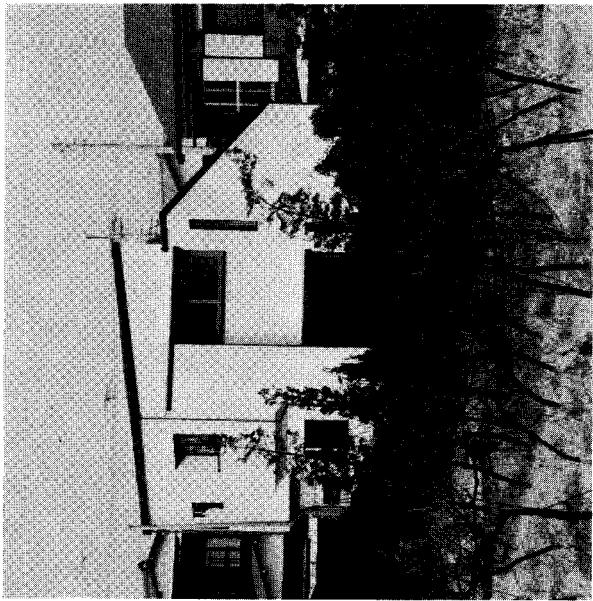
この家が出来て1年目を迎える前に考えていた生活空間と現在の生活の場としての空間とを比較してみると、なかなか思う通りにはいっていない面がある、他人の設計ならばチームをつけられるが自分で設計したばかりにしかたがない。これを一つの機会により生活と結びついた空間技法と、住宅設計における現場処理方法を多く経験してゆきたい。



北側立面図



断面図



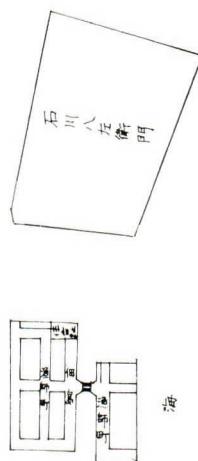


シリーズ『都市』3

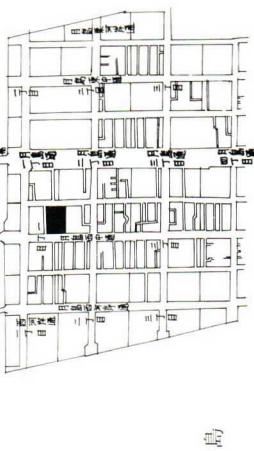
月 島

明 夫 子 雄 司
月 藤 勝 祥 秀 利
秋 伊 大 沢 金 森

はじめに



延宝以前の形（当時は石川島と御島があるだけ）



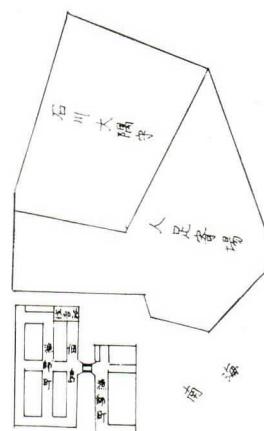
明治38年の月島

月島の成り立ち

月島は明治の中頃に、埋め立てられた土地である。江戸時代には、佃島南方の海中に、見えかくれした洲渚にすぎず、明治の初年まで、そこにあったのは、石川島と佃島だけであった。

埋め立ては、明治20年頃から着手され、第一次の埋め立ては、明治25年に完成され、第二、第三、第四、と続いた。（これが現在月島一丁目、二丁目、三丁目、四丁目となっている）昭和5年の第四号の完成に続き、勝闘、勝闘、晴海地区が埋め立てられ、現在に至っている。

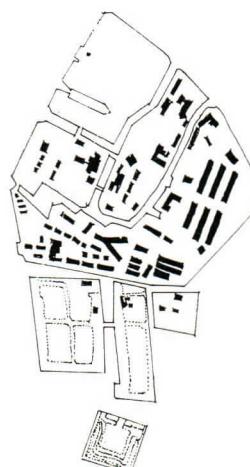
月島は石川島に続く工場地域として、この頃から低層の木造住宅が、続々と建設され、商店街が並び、工場街を形成していった。



寛政二五年の形（石川島が埋立てられ広くなつたが、月島はまだ出来ていない）



昭和47年の月島



明治二十年頃の形（明治に入って埋め立てが始められた月島）

■ 路地空間のコミュニケーション

この地は、埋め立て出来た土地であるために、整然と区画整理され、格子状の道を構成する。道で囲まれた $100\text{m} \times 50\text{m}$ のプロックは 5 ~ 6 本の路地からなり、その細い路地の両側には、十数戸の家が並んでいる。

月島の空間特性は、そのような長屋によって囲まれた外部の空間である。

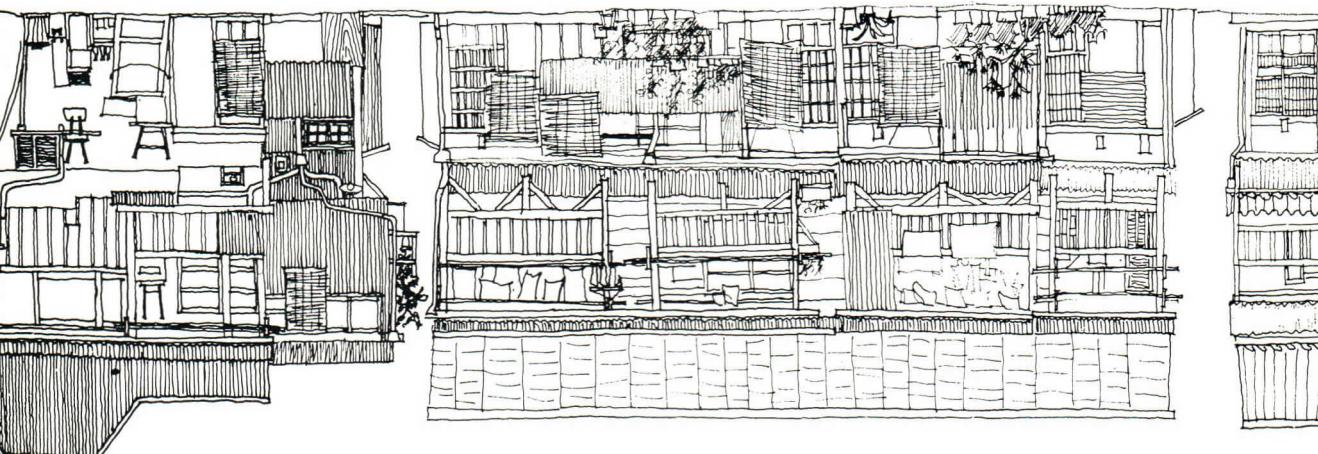
格子状に区画された道路に対して、同一方向に、同じバーンの繰り返しの路地が、配置されているにすぎない。

しかし、長屋によって囲まれた路地は、その路地のまわりの住民の、直接的な生活の場となっている。この路地は、単なる細い道、通路ではなく、彼らの庭であり、物置、物干場であり、玄関前のたまり場であり、そして戸外のリビングルームなのである。

一日の生活をみても、朝のそじから始まり、子供達の遊びの場、主婦達のおしゃべりの場、老人の日なたぼっこ、すれ違いの挨拶、猫のけんか、自転車の手入れ、植木の水やり……毎日毎日が積み重なった、長い時間によってつくられたこの空間は、それぞれの構成要素は、似通った、物干竿、植木鉢、等であっても、どれ一つとして、同じものはない。

どの路地を覗いても、それぞれの方法で、人々はその空間を演出し、使いこなして、暮している。

この路地空間が、建物と、人々の間に存在し、媒介となって、人々のコミュニケーションの基盤となり、更に深め、育していく場所ともなっているのである。



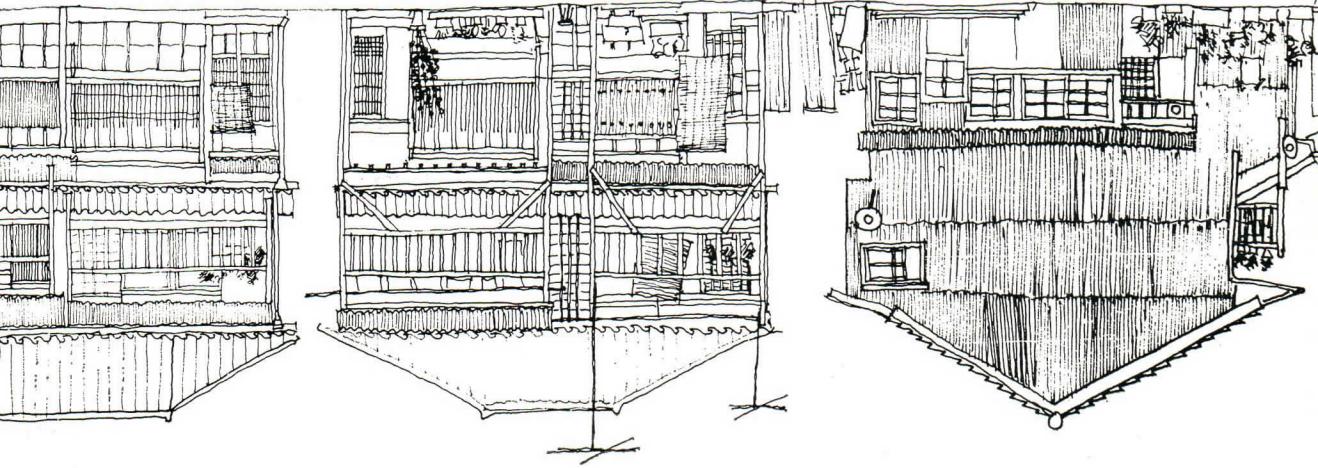
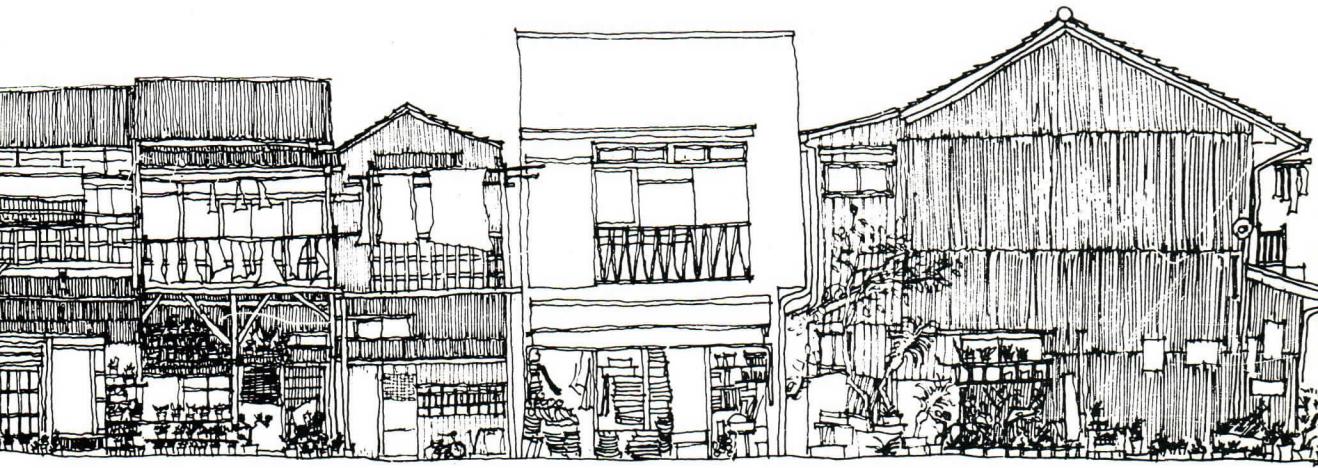
■ セミパブリックな共有空間

住居環境において、一般には、公的 sociale の場と、それに対する私的個人の場という、二つの相対する場が、必要であると考えられる。しかし、その二つの間には、あまりにも大きな隔りがある。パブリックについては、道路、公共施設、等の社会的領域で、プライベートは個室という個人生活領域である。

この二つの領域には、使い方においても、使う人にとっても、大きな違いがあるのである。

この中間に、半公的で半私的な「セミパブリック」な空間——つまり、月島における路地空間のような——が、存在した時、二つの領域の差の隔りからくる断絶が、なくなっているのではないかだろうか。

最近どんどん建てられている団地、マンションのような建物では、なかなか見ることの出来ない、月島の生活は、このような路地——共有空間——というコミュニケーションの基盤によるものである、といえるのではないだろうか。



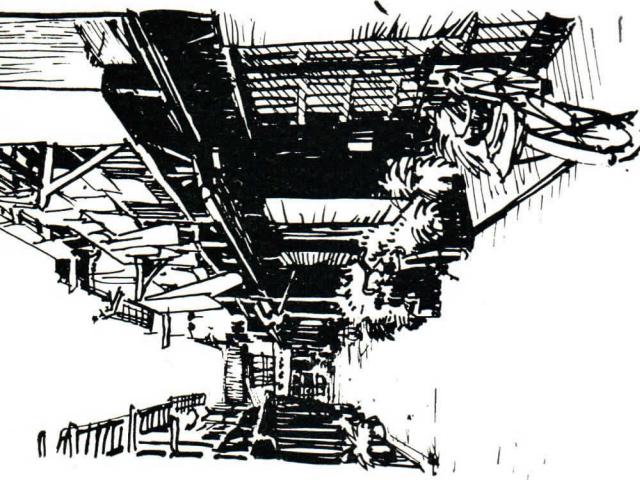
■ 共有空間の問題点

月島は約40haの面積で、人口密度は400人/ha以上、所によつては、500人/haのことろもあり、面積から考へても、又、その日當り、風通し等の条件をみてても、決していい環境とはいえない。本造住宅は老朽化し、路地空間のコミュニティの高さは、狭い住宅から湧れ出した現象という見方も、できるであらう。

物の不足から共有せざるを得ないような場合、各戸内部にあるべき機能が、外に流れ出していく。そういう現状をも、共有といふ、言葉の中に含め、親しみやすい、暖かいという言葉で変に美化してしまうのは無責任でしかない。

人々の生活の中で、共有すべきものと、そうでないものを的確につかみ、眞の共有空間とは、一体どういう形であるのかを、これから、更に、追求していくがなければならない。

我々が月島のサーヴェイから学んだことは、單に路地空間という、フィジカルなものではなく、路地空間においてみられた、人々の生活と、環境のかかわりあいであり、地域の住民が、環境をつくり出ししていく毎日の生活の様子であった。



月島は老人が多い、外のベンチに腰かけて何時間も過ごすおばあさん達

調査について

我々が対象にしたのは、月島一丁目の一部で、路地三本を含んだ区域である。

一丁目は、月島でも一番早く、埋め立てられた区画である。特に、対象とした地域は、木造の低層住宅が、割合多く残っている地域であり、三本の、路地の幅、路地のまわりの住宅の高さも、それぞれ違った性格を持っている。

○実測調査 昭和46年8月

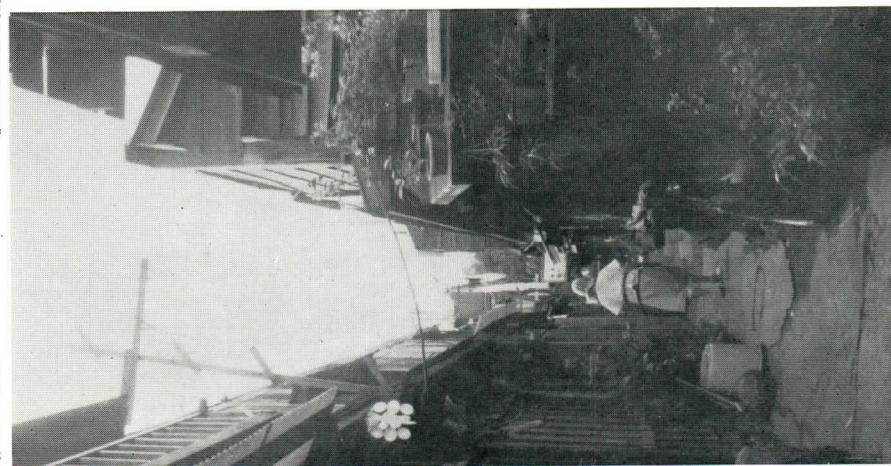
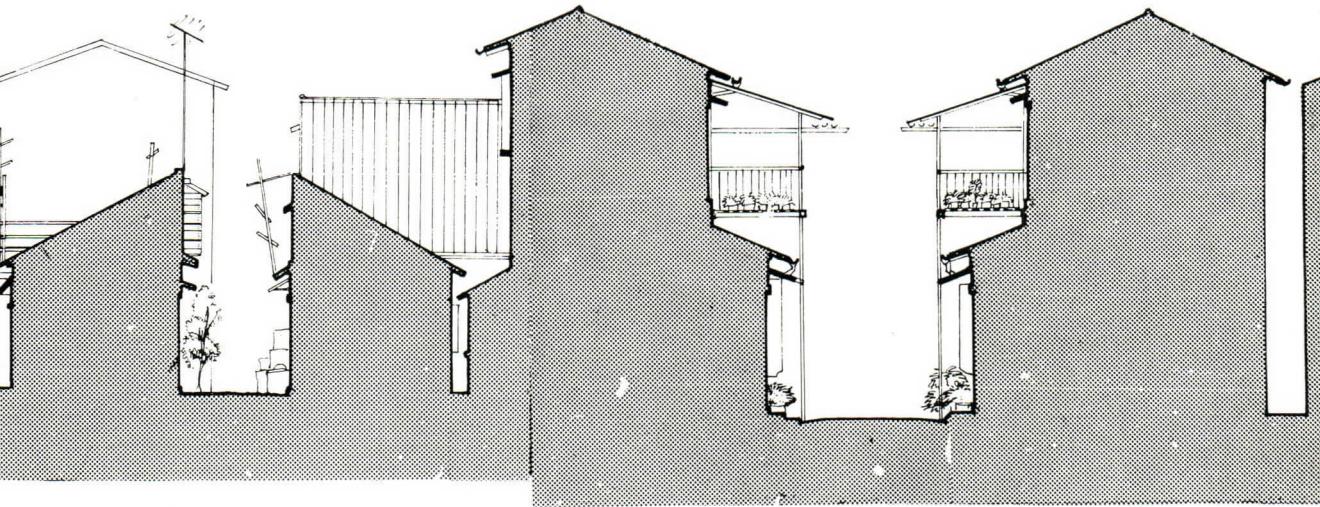
○アカティビティ調査 昭和46年9月22日(金)

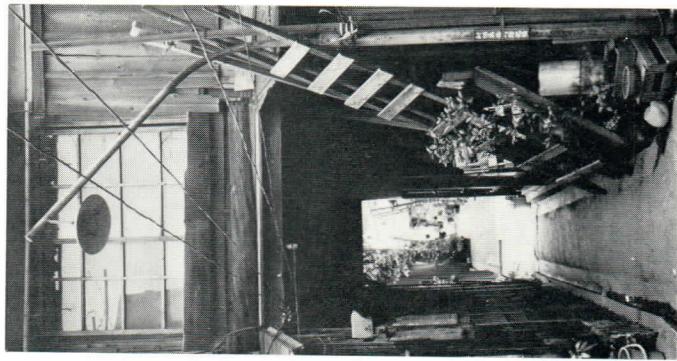
6.30～22.30天候晴

この路地三本を含めたこの辺の土地、家は、すべて貸家である。この家賃は、驚くほど安く、一軒家でも、2,000円～6,000円程度ということである。最近、空いた家を賃さずに、そのままにしているということで、家主さんが、この辺を整理して、大きなビルでも建てるつもりではないだろうか、という噂があり、我々があちこちを測ったりしているのを見た老人達は、心配顔で尋ねてくる場面が何度もあった。

月島は、老人の人口の比率が、他の区より高く、老人クラブも多くある。日なたぼっこをしたり、世間話をしたり、お茶を飲んだりしているおばあさん達が、我々の情報源となってくれたのである。

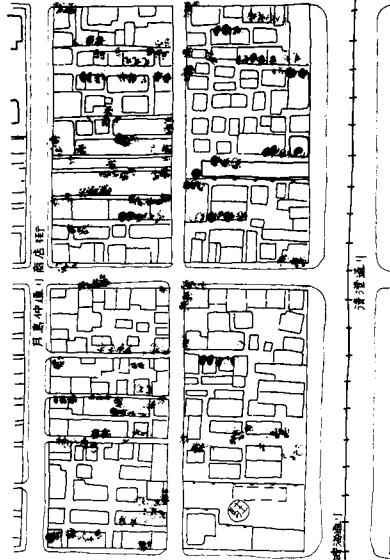
又、おわりに、この調査に当って、御助言、御指導下さいました、山下助教授・谷口助手に深く感謝いたします。



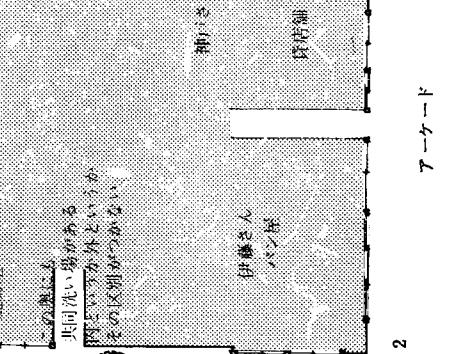
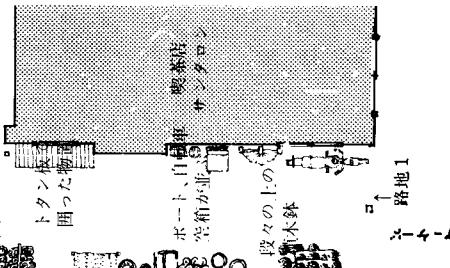


月島の植木

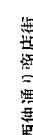




15~20個



路地

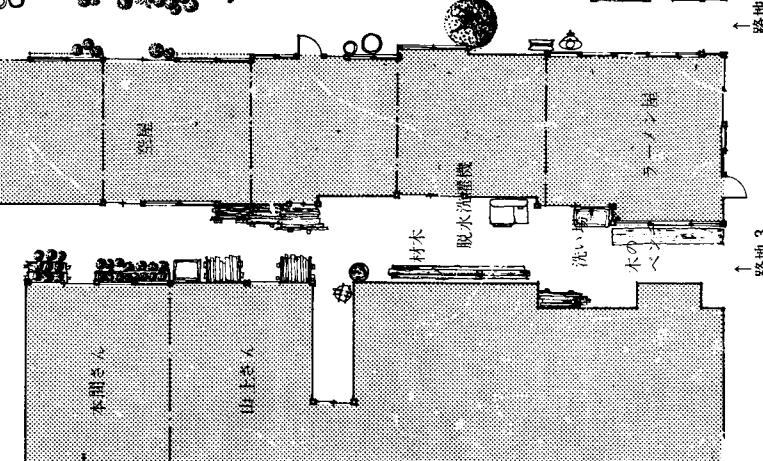


2

3



西仲通り商店街



3

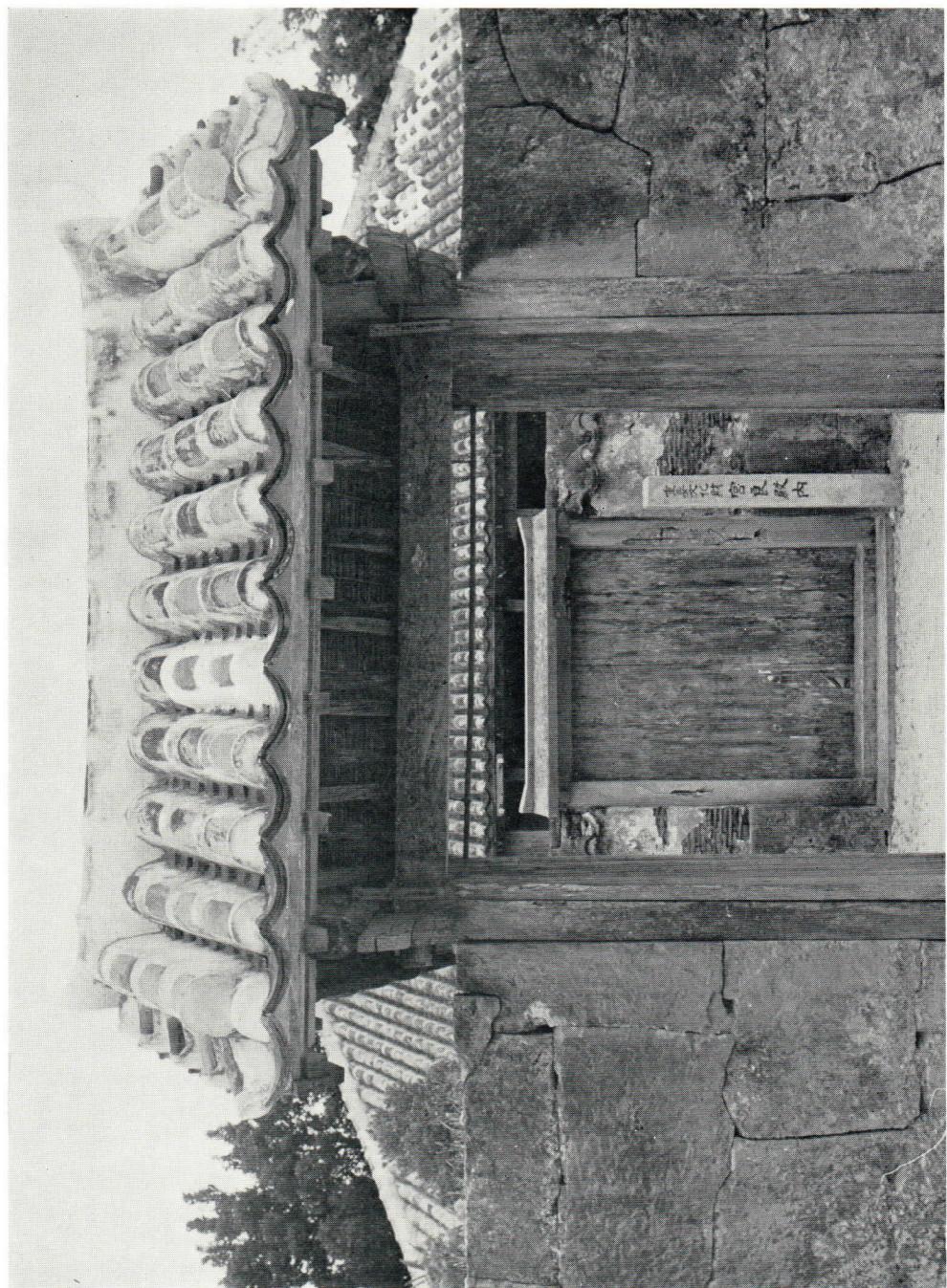
戦後のマーケットがそのまま残り、これが仕込みしているため、この路地は不整列で寂らしくはない。階段、老朽化もひとく路地と並んで多い。共同便所と共同洗い場を共有している。がちゅうさんが軒

路地2が入り込んだため、この路地も細い。はじめの建物はほとんど階建であったが徐々に改築し、2階建になつたり、物貯がつけられた。では、物貯がとび出したりしている。では、壁でつながっている。

70~90cm間隔で両側に5~6むね並ぶが、1軒の間口は入口1間、窓2間、奥行も4間程しかなく、

琉球列島・飛び歩記

大場光博 (大学院46年卒)



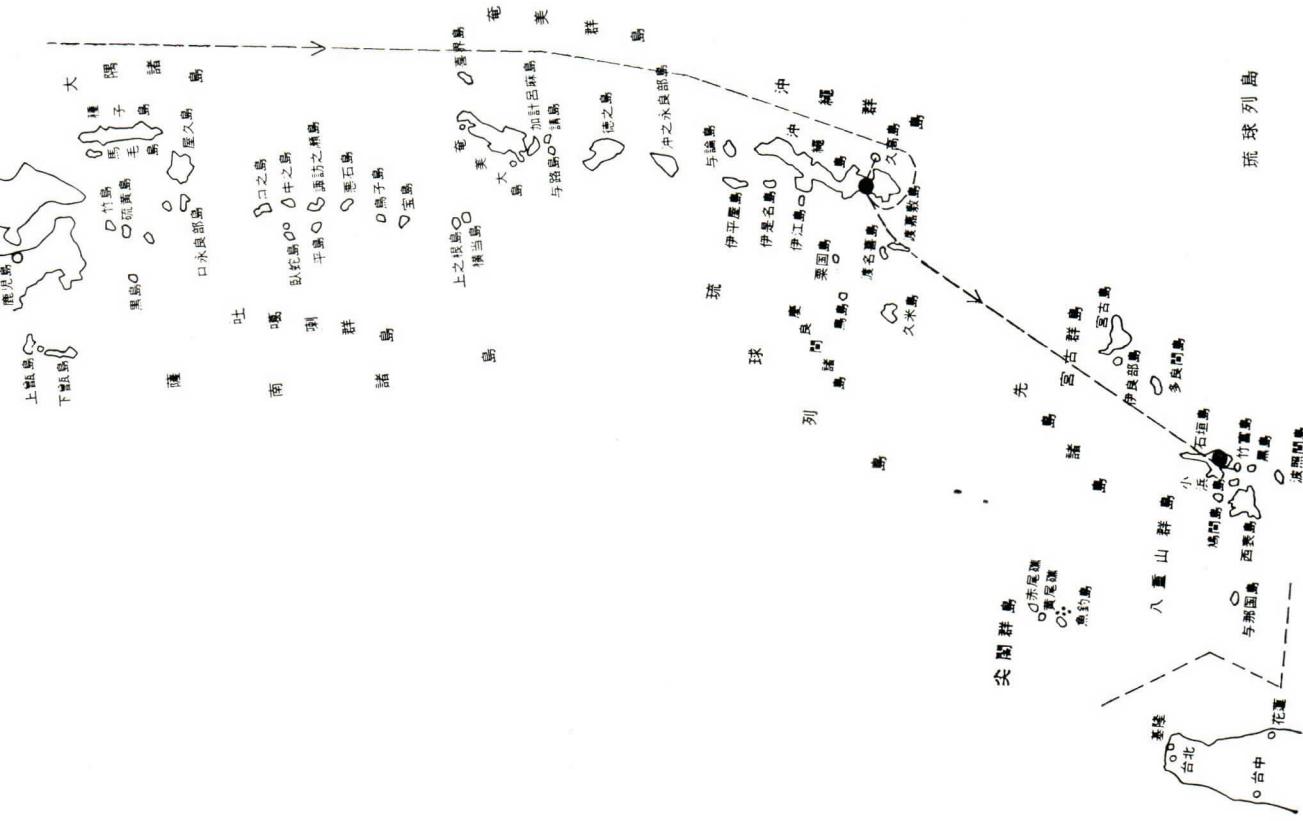
宮良殿内 (返風にあらる中門)

■ 旅出ち

海が荒れた日だった。千葉沖で小型漁船が沈没、春一番が吹ききされた3月31日、琉球海運所属「なは丸」5000t、この日晴海正午帆が、この風で3時間程度遅れた。見送りの人々は、30分前に手を振って去つていった。ジャーン・ジャーン・ジャーン、出帆の銅鑼がなる。見送り届れば、寒い甲板にいることもなし、カシアス・クレーニーのヘビー級タイトルマッチを見る。又銅鑼がなる、ああ出帆か。「まだこの位のローリングはいいほうだべ、わしらがこの間、この船に乗った時はなあ、スクリューガが空回りして、ありや波の上にスクリューが出来ちまつたんだべ」「アッハッハッハ」1人の老人がそばで話しかける。そうかねえ、でも揺れると腹がへる。まさかこの船に2日も乗るとは、運命の悪戦か。

青い海が近づいてくる、48時間目に水平線の彼方に小さな島が右手に見えてくる。あれは雲、そしてこれは島、珊瑚礁が美しい。「海ってのは、緑色とエバルトブルーの空が混つて、こんなにもきれいに見えるものなのだろうか」「東京の海はまるでドブだ」。那覇港に着く、さすが軍港が近いだけあって、U.S.Aの上陸用角艇がゴロン・ゴロン、米軍機がやけにうるさい。沖縄に上陸してから、沖縄本島南部を一巡り。南部は昭和20年6月24日の正碎までに20万近い人々が亡くなつた。

「私も、両親と兄弟全部を艦砲射撃でなくして天涯孤獨になりました。私だけが幸い体半分埋つただけで助かりましたが、時々寂しくなると車を運転して一人でいつのまにか、皆んなが死んだここへ来てしまうのです」2mもある青々とした砂煙キビの烟の真中で、案内してくれたKさんは、そう言わわれた。



■ 八重山群島

次の日僕は那覇から船で2日、時間がなかった為にでYS11で1時間、八重山群島に飛ぶ。石垣飛行場に着いたのは、朝の10時、早速市内を一巡、宮良殿内、石垣殿内を見る。殿内はかつての上流支配者の住居である。

「この間の戦争までは、首里の近くにこれ以上立派な御殿が沢山あつたのでございますが、皆爆撃で灰になりました」

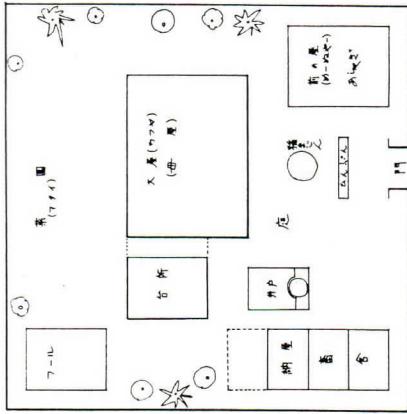
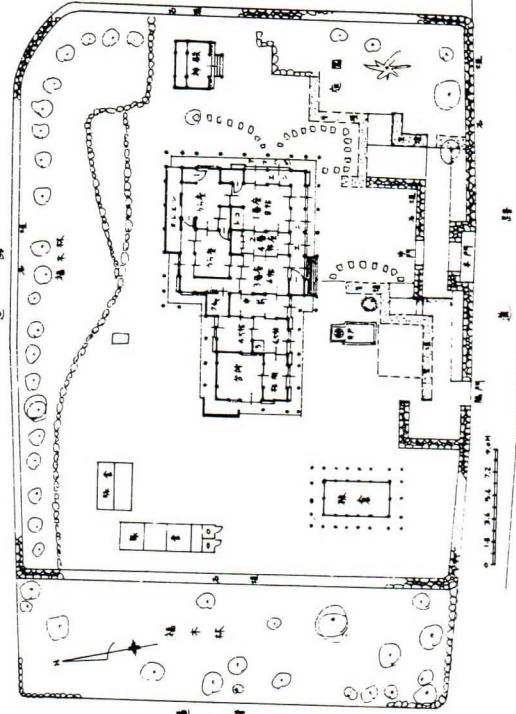
宮良殿内は別図に示すように、門の真中に返風と呼ばれる石垣で出来た衝立がある。宮良殿内はこのヒンブンの中に中門があり、この中門は、盆の折先祖の魂が家に戻り又天に帰る時、娘が嫁に行く時、そして身内が棺桶と一緒にあの世へ出かける時しか開かない一方通行の門なり。

百姓のヒンブンは石壁だけで、開放的な家屋に直接外部の視線が届かぬようになっている。なるほど昔からプライバシーを守る工夫がなされているわけだ。それとも平屋の方形の屋根といい、グルリと取りまく石壁は、台風に対する考慮であったのか、さすばヒンブンのプライバシーは、結果としてそのような意味を持ったのであろうか？

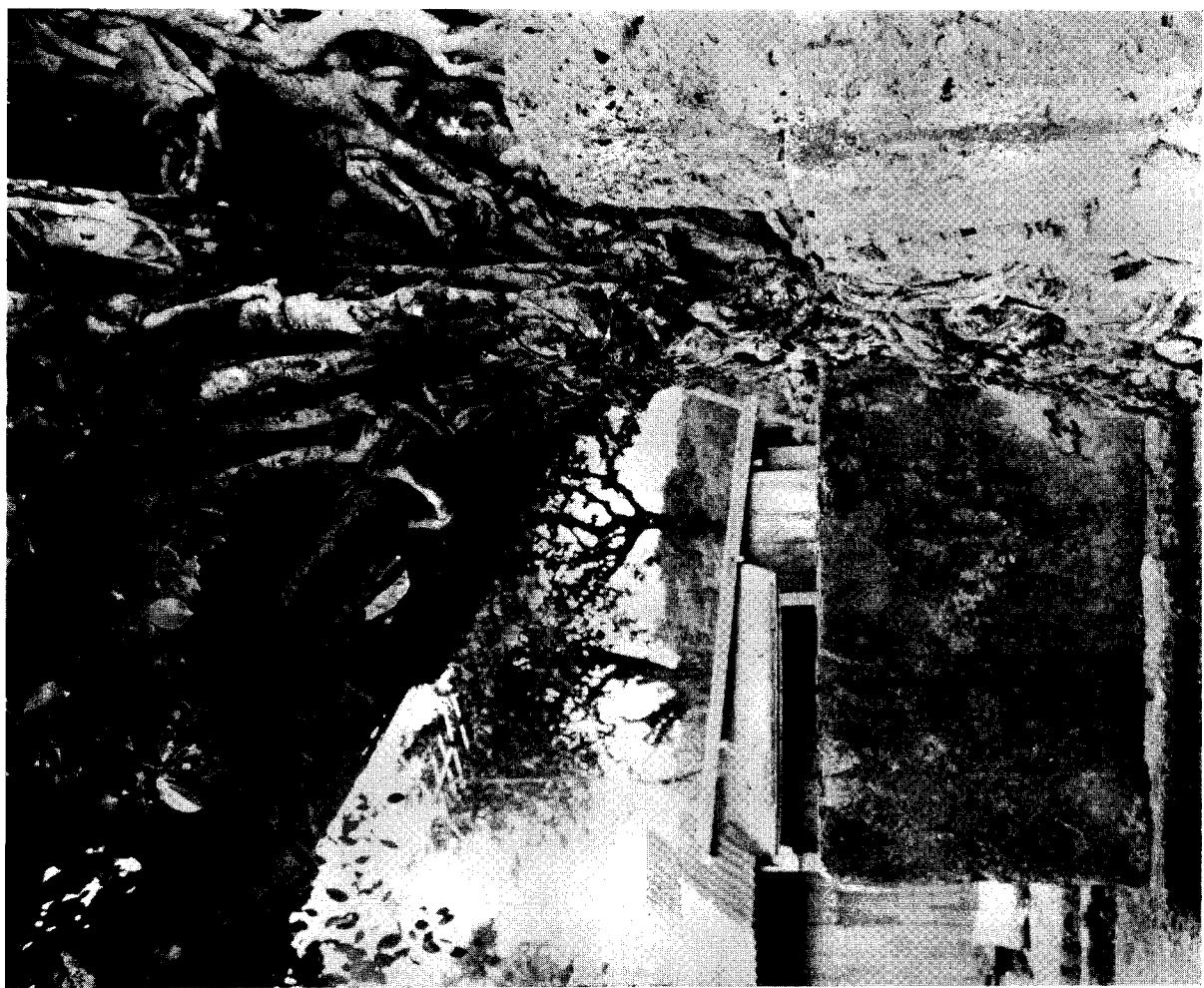
島の民家には、なんとまあ広い庭があることが、ハッピヤ・パナナ・ニガウリそして沖縄独特のガジュマル。

熱帯地方にはえるこの常緑樹は、枝が分かれて、地上に届くと、根になってふえ、頭の大きさ程の石ころをただ積んだけの石屏風叫められた如く、ガッチャリと石ころをつかんでいる。

そして小さな住居のまわりは、火災にあっても燃えない肉厚の葉をもつクギ、イスマキが植えられている。住居間は10~20mの距離がある。なるほどこれなら家の中でいくら騒いでも隣りから文句の出るはずもない。沖縄の歴史をひもといてみると、琉球王国の、1667年に建築用材や造船用材の乏しいことから、身分手相応の用材使用、つまり檜・木舟等堅木の乱伐使便を禁止し*、1737年には検地を行い、屋敷規模の制限と家屋の制限令を公布した。これによる



出典：又吉真三・琉球の建築文化史（二）
琉球の文化 第2号



と敷地は王族や上級士族は300坪程度、平民は80~100坪程度、一室あたりの畳数も差があり、王子・按司家は22.5帖以下、平土は8帖以下、平民は6帖以下、これらに違反した際は取扱しの上処罰さ

第一表 敷地の制限

家格	寸	法	広	深	備考
絶地頭家	15 ~ 16間角 約27.3 ~ 29.1メートル角	225 ~ 256坪			王子、按司家
脇地頭家	12 ~ 13間角 約21.8 ~ 23.6メートル角	144 ~ 163坪			
平土	10間角 約18メートル角	475 ~ 556坪			100坪
平民	9間角 約16.3メートル角	331坪			81坪
					265坪
					メートル
					百姓

第二表 畠数の制限

家格	一室当たりの畠数	備考
絶地頭家	22.5畠以下	王子、按司家
脇地頭家	16 "	
平土	8 "	
平民	6 "	

出典：又吉貞三著・琉球の文化史（二）

れた。しかし、平民は家族数も多かったそだから人数の割には差があったように思われる。話して聞くと王家は税金のカタのように何人も妾を連れて来たそうであるから、人数に対する屋敷規模としては公平なのであろうか、それにしては封建時代の取り決めとは階級差をいかに明確にするかに努力がはらわれ、何と馬鹿々々しいことに労力をついしたことか。

このように取り決めにあった家屋・敷地の住環境が現在の住環境よりも豊かだとは、単純に考えれば、封建時代よりも資本主義社会のほうがひどいのだろうか？

■ 竹富島

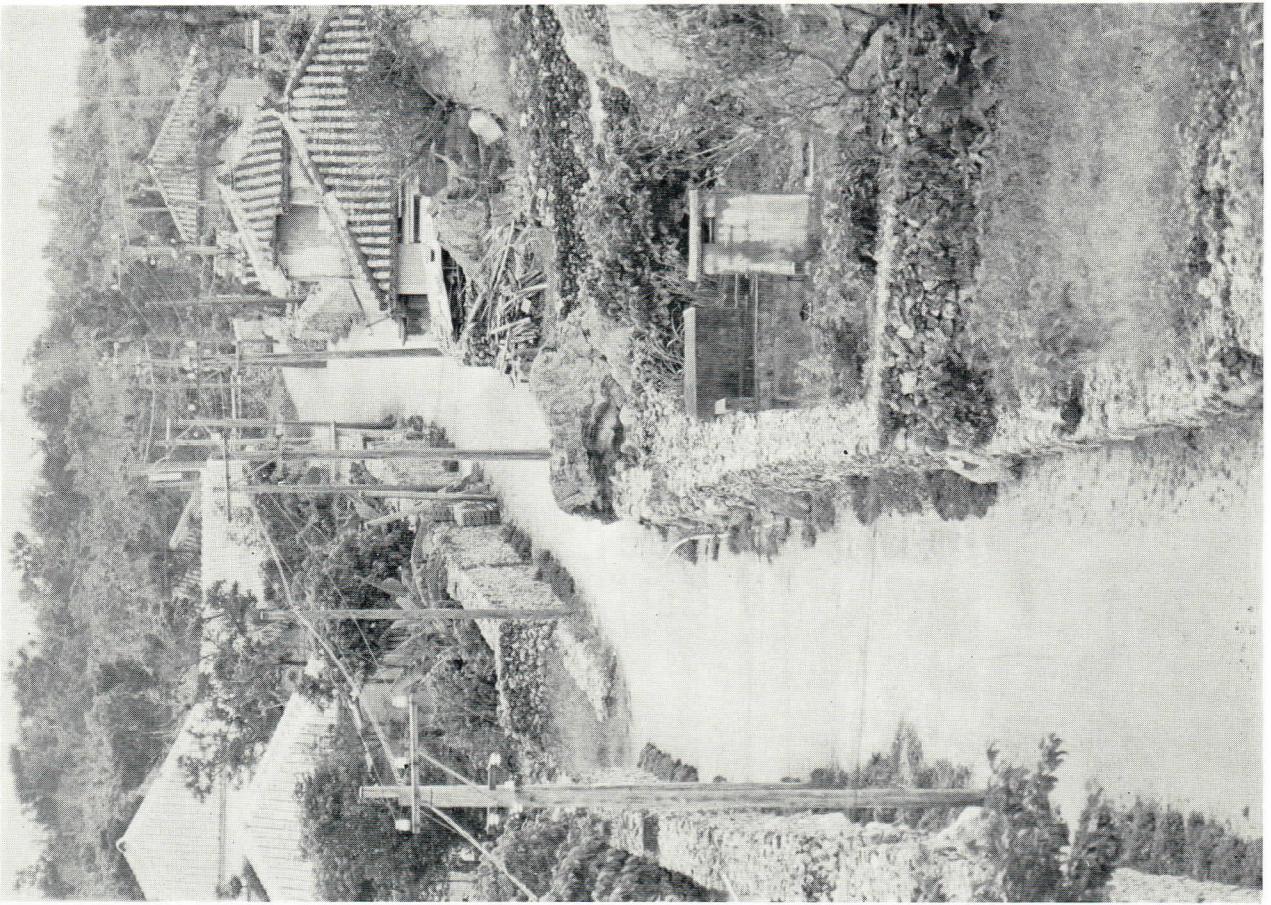
八重島の竹富島はまるでおとぎの島である。1日1便の渡し船で島にわたった頃は、船賃40円、あんなに美しい島があるのだろうか。道には白い砂が敷かれ、カーマインの瓦の屋根とそれに対比する白いしつくいと、本当に青い空は目にしみる。この島でおじいさん(73才)のところに泊めてもらった。

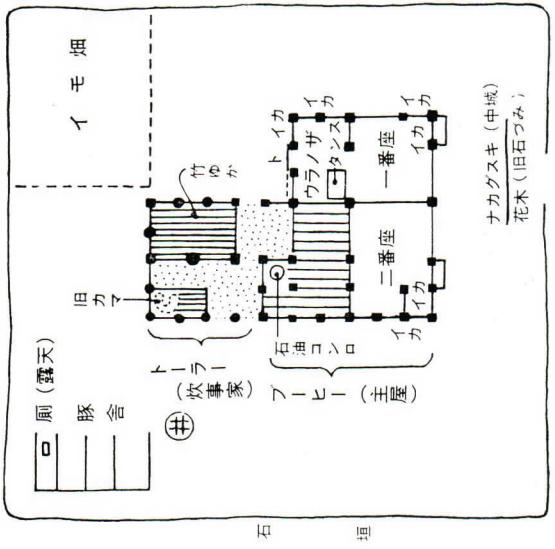
この家屋は双子屋のように(別図)主屋と別所等の附属建物は別々、写真に見られるようにクネクネと曲がった道が続く。本来自然の中には、ドラフターやT定規で描いたような直線ははしなかったのでは。従ってこんなクネクネ曲がった曲線のほうが人間にはフィットするのではないかろか。集落には建築家は一人もいなく、それでもこれ位の家屋はなんなく築かれる。建築家がいなくて住民全てがどうしても参加せざるを得ない集落建設には、何百年もかかって残された先祖の知恵が生き続ける。台風の前には、白いしつくいで屋根の修理を行い、低くて重い屋根と石垣はどんな強風にあっても飛ばされないように、そして、車を中心でない人間のスケールを基礎とした、人間がのんびり、余裕を持って生きていける集落構成。こら辺から僕達は何かを学ぶことができる。

たとえば東京。都市化が進むことによってねずみが共食いを始めたような、人間同志が信じられないような精神的欠陥都市は、息をするのも窮屈、東京に住む人間が、東京を抜け出すと何故もあ、ホットした気持になるのか、人間は本来、自然と一緒にリズムで生きる生物でしかないので、いつのまにか自然を征服したような、だいそれた思考を生んでしまったのだろうか。

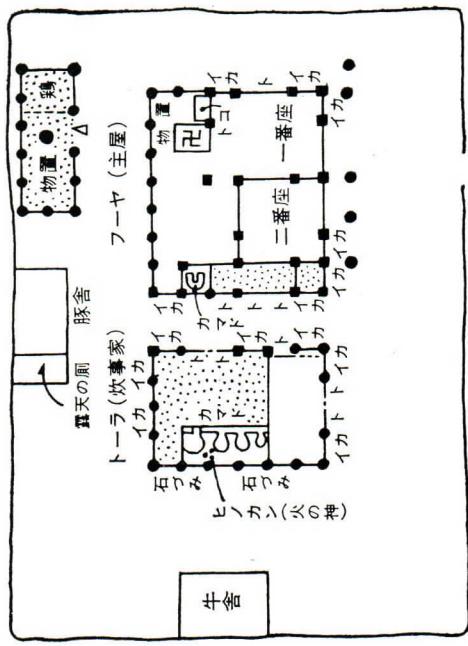
■ 神の島・久高島

久高島へ渡ったのは、第2回目の調査(1972年10月20~30日)の時、琉大教授、仙松弥秀先生の話では、「かつて沖縄人は、南方の方から船でこぎ渡ってきたのでしょうな。どこ歴史を見ても最初は大きな島には決して上陸はいたしません。どんな怪物が陸にいるかわからぬ。そんな時には、大きな島の周囲にあって、短時間の





沖縄石垣島（八重山石垣市）自保の山里藤氏宅



沖縄竹富島（竹富町）の野底啓一氏室

認められていく。

島に深るうちに島中歩きまわれるような小さな島に、ひとまず根拠地を設け、次第に力がついたら目ざす本島に渡ったのです。本島に深る際も決して島の奥には進まず、島の海岸沿いをチヨン、チヨンと巡り、周囲がおおよそいつめてから、さて奥地に入ったもんです」久高島は、そんなうちらの、始めて沖縄人が南方からたどり着いたと思われる古い島です。海岸は絶壁が多く、海がしけると船は出帆できかない。車は島の区長さんとのころに、軽のライトバンが一台。従って集落の構成は昔のままであるが、この間の戦争でほとんどの家屋がグラマンによる艦砲射撃を受けている。

同行のKさんと一緒に、集落を覗いていたら、急にボッカリ開いた広場で、異様な集団に出くわした。自装束に身をつつみ、年の頃30才以上の裸足の女性が50人ほど。中央の祭壇では、赤、青、黄、緑一色のみの衣装をまとった、それぞれ70才以上と思われる4人の

このような錯覚。この行事は後で話を聞くと旧暦の9月に行なわれる、神に対する農作物の感謝の祈との事であったが、この現象を始めとした、久高島はかなり古い風習が残っている。例えば土地については、全て共有であり、男子が16才以上になれば、土地が与えられ、60才まで継続して使用することができる。又その男子の第一子が16才になれば新しい土地の候補と古い土地を比べ、どちらか良い方を使用することができる、土地の分配も、同じような条件にするため、良い所、悪い所をそれぞれ細かく分割し、村民が全て1戸平均400坪を平等に与えられるように考慮されている。

明治以降は、自家の敷地の所有は認められたが、農地は原始共產

■ エピローグ

僕の歩いた集落について概略まとめると、家屋は、一番座、二番座と呼ばれる座敷があり、玄関はなく直接外部から雨端を通じて入ることができる。雨端はスコールのような横なぐりの雨が降つても、雨が建物の中に入らぬよう、夏の強烈な直射日光を射断し、建物の脚廻りの腐蝕を防ぐために、3～4尺程度縁にそった樋が設けている。

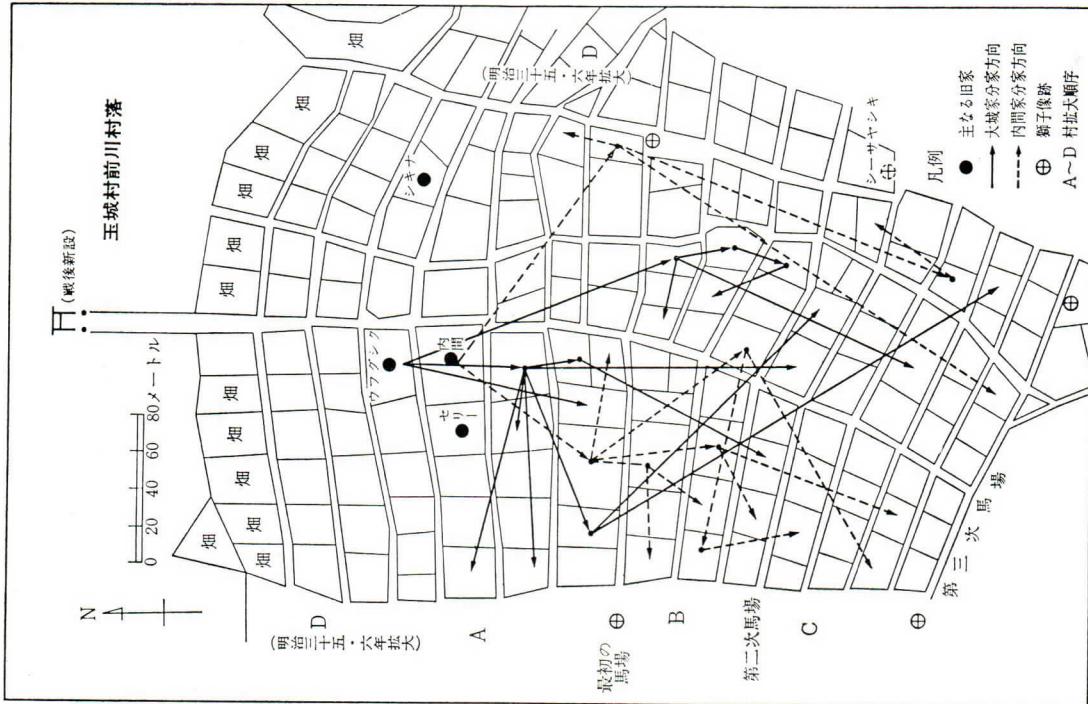
集落は、沖縄本島南部、玉城村前川地区に見られるように、沖縄全島が珊瑚礁地で粘土質が堆積した為、海からの蠶害をさけ、雨水の流れを考慮して南面した傾斜地に設けられている。そして一番高いところに、集落の先祖で、且つ守り神である御岳があり、そのやや下に総家（ウファグシク）と言われる集落最古の屋敷があり、以後その分家が順序よく南下して、150戸程度の集落をつくっている。

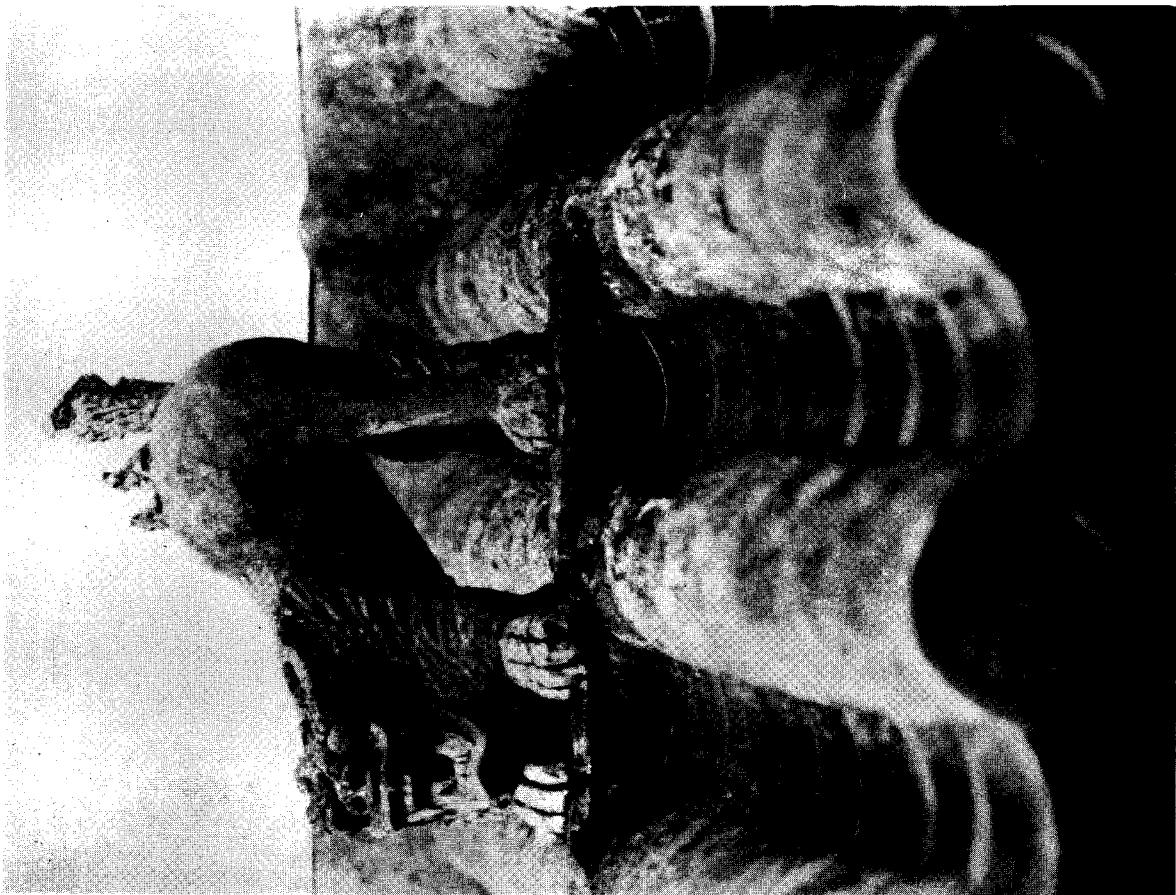
その他の集落とも共通していることは、人間のスケールで築かれた集落は、一軒一軒が石垣で明確に区分され、ヒンブンに代表されるように見通せない開いが、プライバシーを侵害せず、さらに豊かな礼儀作法と、親切でもの静かな人々がこの生活を守っている。個々の家屋は必ず広い前庭があり、これが住居間の適度な距離を保つと共に、生活の知恵としての悪熱帯の植物が、それぞれの特性に応じて植えられている。更に重要な事は、建築家はなく、住民全てが自ら家を築き、使用して、悪いところは自ら現寸図を引いて修理すること、自分の環境を自由に変更出来るところに大変大きな魅力を感じた。そして、沖縄の村々は、未知らぬ人々をシンナリ受け入れてくれるあたたかい心が残っている。

現代の都市が持っている様々な問題、都市集中のあまり、人間生活が物質的にも精神的にも崩壊し、互いに信じ合えぬ人々の集團に、何ら解決策を持たずしてこのまま見逃すことは出来ませんが、それではどのような具体策をなすべきなのであろうか？
それは単に物質的な解決のみでなく、社会制度自体に対する考察と同時に行なわなければならないであろう。

沖環の集落の特徴として、ヒューマレスケールが生きているこ

出典：仲松弥市・その他著・古層の村『村落共同体』





シーサー(魔除の駒)

と、集落の中に車が入っていないため、人間を中心とした古い形態が残っていること。そして、制度 자체が今猶、自然と一体となつているところに、大変貧しさがあるにもかかわらず、多くの住民間の交流があり、人々の中にゆったりとした余裕がみられた。

経済的又文明の利点と云われているものに販り残されているにもかかわらず、何故か包容してしまう魅力をあきらかにしてみたい。

生活を営むには、その内容と同時にそれらを取まりく物的環境があり、物的環境の集積が生活環境として存在し、更に社会制度と内容を分析し、それに对应する空間の分析が行なわれ、何らかの法則があきらかになれば、新しい計画をより正確に作製することができるとと思われる。

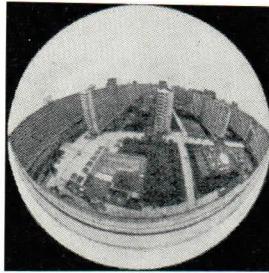
そんな意味から今後とも、沖縄の集落を中心とした社会の在り方から、様々なものを学ぼうとしている、昨今です。

終わりに、又吉真三氏（元琉球政府文化財専門審議委員）・外間正幸氏（沖縄県立博物館々長）・仲松弥秀氏（琉球大学教授）・親泊元高氏（沖縄工業高等専学校教諭）・久高幸正氏（二幸建築事務所代表）・与儀清春氏（同所員・本学43年卒）の方々に様々な御助言を頂きましたことを、深謝致します。

参考文献――

1. 沖縄文化史辞典 琉球政府文化財保護委員会監修
2. 琉球の文化 第2号 琉球の建築文化史（二）又吉真三著
3. 村落共同体 古層の村 仲松弥秀著
4. 琉球地方の民家 鶴藤鹿忠著
5. 沖縄一千年史 真境名安興著





居住者としての私

黒沢秀行 (41年卒)

設計活動を始めて早5年間が過ぎ去ろうとしております。その間、開発的仕事の中からいくつかの集合住宅を計画設計し、現場監理をする機会にめぐまれ、これらの計画を通して「住まう」「住まわせる」という事又、それに、附隨する住環境についていくつかの提案を行ってきました。そして机上のコミュニティ論の空しさ、予算あっての設計、等……現実の厳しさを晦渋してきました。

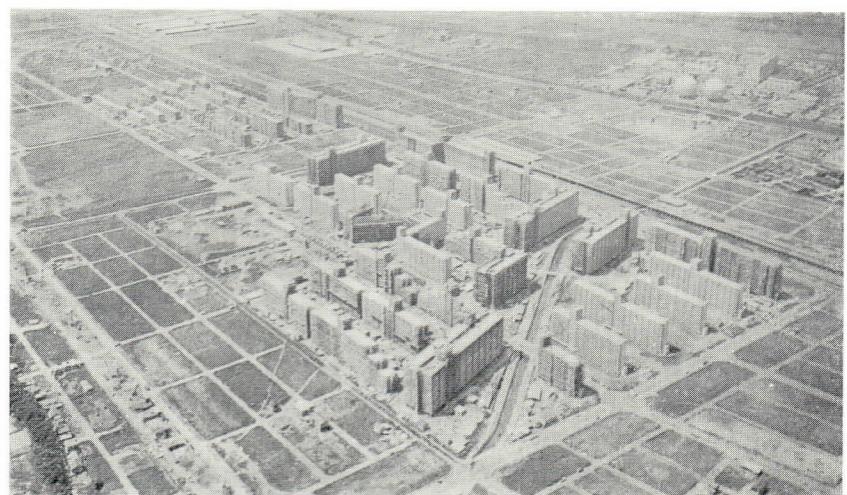
そんな私が……たまたま、いやこの住宅難の折では首尾よくかも知れないが約1年前より、立場が逆転し居住者という形で高層の団地（完成時約10,000戸）の住民となって集合住宅のあり方（一寸オーバーかな？）をフィードバックして考えてみる事が出来そうなチャンスが与えられました。今回は私の住む高層の団地について設計をやっている一居住者として高層集合住宅という特異なる状況に於ける生活を一寸省りみると、様々な複雑な問題をはらんでいる様に思われます。

まず外観的には非常に画一化されている様に見えるが実は設計段階で配慮された点も住民にとってはあまり使われていない様な所もあったり、あるいは設計段階での予測を

はるかに越え混乱を来たす様な点もあり、いかに設計というプロセスの重大かつ重要さを改めて痛感させられました。

■ 広場と公園

中央に広場があり、ジャブジャブ池という子供達のための浅い池等もあるがその広場は広場として……？の使われ方をしているのか単にショッピングへの通路的性格しか持たないのではと……非常にあいまいな感がいたします。広場としての性格を發揮したのは選挙戦時の演説会場として使われた時位しかそれを感じさせたに過ぎない様な気がします。私達の計画する広場はその性格づけの適否は今後大いに考えさせられる事です。又、公園は各建物を意識して配置されている事は確かの様ですが、しかし、高層であるが故にどこから来るかと思われる程遊びに出て来る子供達の多い事、それらに対しての公園の広さは必ずしも満足出来るものではない。上階から公園を見下しているとまるで芋洗いでもしているかの様に狭い砂場に所狭しましと子供達がうごめいている……かの感が強いのです。

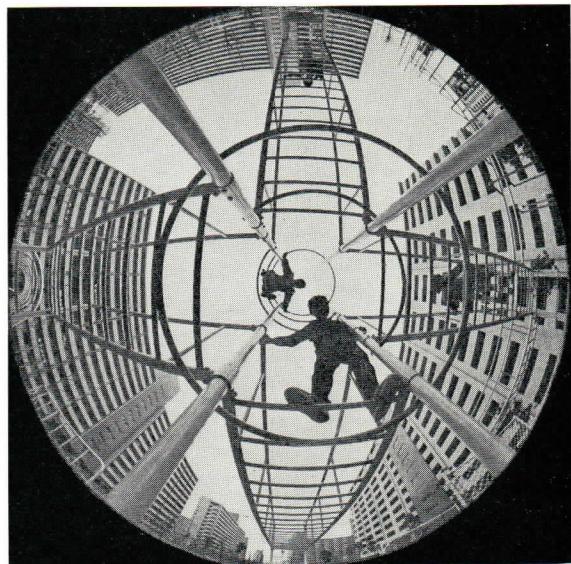


高島平団地

この様に一見、画一化された住空間に設けた公園は必ずしも好結果をもたらしていないのが現実の様です。これに反して、各階にプレイヤードが設けてあるが日常の様子では子供達もそして子供達を通しての大人達も利用している所を全く見ないので。逆に長い廊下やエレベーターホール等は格好の遊び場の様であると共に大人達のコミュニケーションの場でもある様です。多分、これは計画上からも予想されなかつた事だと思います。結果としてはプレイヤードというある静的空間（クローズド）よりもやはり動的空间（自転車・三輪車・等動的移行を基調としての遊びが子供達から要求されているからではないだろうか……。反面、小規模ではあるが多目的屋外運動場の様なものが備えられている点は非常に利用度も多く大人・小人に限らず利用されている（大人はテニス・バトミントン・バレーボール・キヤッチボール……等、小人は自転車乗り、ボール転し……等）のは好感が持てます。

諸施設（店舗・集会室・保育園……等）のます絶対量の不足が掲げられます。一応生活に必要な施設は名目的には備わっておりますが主屋のタイプは幾つかあっても入居資格……等で自然に年令層や家族構成に枠が出来施設がそれをカバー出来ない状態です。これからは保育園・学校……等の問題が益々浮き彫りにされて来たそうです。

規模が大きくなればなる程そのひずみが大きく表われる故計画時の予想は周知を集めてからなければならない事に再認識させられている次第です。店舗などについては入居してからしばらくは団地内の道路の端に露店の商店街が出来、かなりの賑いもたらしたが、しかし、衛生上や団地内店舗の保護……等により現在ではそれが禁止されてしまった。これらも計画に組み込まれていたならばもっと活気

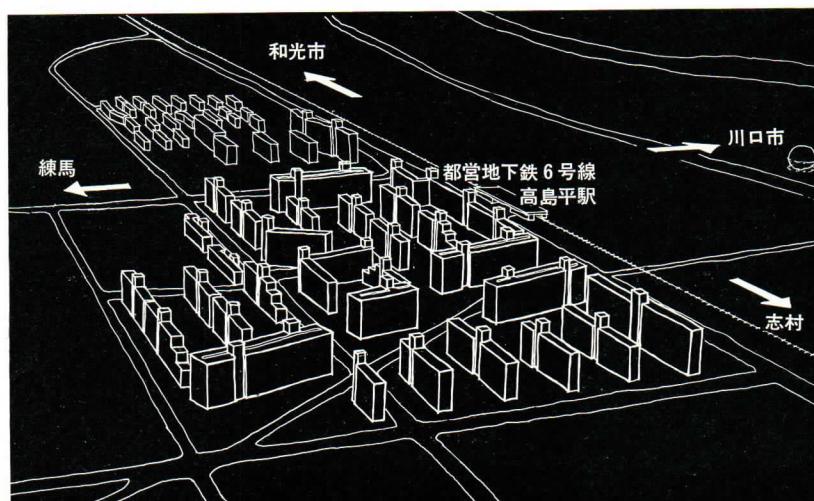


のあるユニークな「市」が出来たのではと、残念に思っています。

■ セルフェイド系

ペルーの国際コンペ以来、馴染み深い言葉となって私達設計する者のウォキヤブラーに加えられました。この団地をはじめ私達の創って来た集合住宅に於いてもなかなか難しい問題です。

共同生活の中でそれらを設計に組み込み、竣工後の設計者管理者としてどの様に指導し、どの様に整備していくか……問題は居住者一人一人の生活環境に対する意識の程度問題なのか……次に、これを押し進めるには、向こう三軒隣的なスケールがあるのか……等、これからも考えて行



きたい大切な問題の様に思えます。

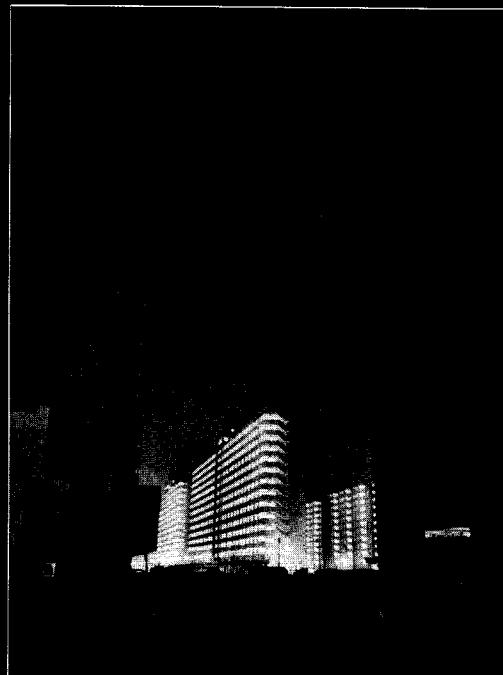
もう一つ、望まれる事はどんな施設の完備された集合住宅でも忘れてはいけないのは住民の心ではないだろうか、即ち住民のモラルの問題であろう、例えばエレベーター内の落書、ホールのゴミや上階からの騒音、そしてダストシュート室のゴミ……等、自転車置場の自転車の盗難……等

住民一人一人のモラルの低さをも投げかけている。

最後にここでの生活が少しでも自分の設計にフィードバックする材料となり、強いては広義の開発行為に対するベーシックなデーターを確認し繁栄出来る様、関係筋の努力を期待したいものです。

——団地の一室にて——

撮影・坂 昌 道



行動と検証

—建築関係者の場合—

安 原 治 機 (42年卒)

■はじめに

昨今、建築に携わっている人々の行動が社会から遊離しているのが目に付く。そして、この様な現象が一部の建築関係者から全体へと拡がっている、マンション建設と日照権、レジャー産業と国土破壊、工場建設と公害等、その例は枚挙に遑がない。しかも、これらの例は利害関係、因果関係等が明白である為に、特に目立っている、永山の一角に過ぎない。

建築は注文に依って建設されるのであるから、注文主が加害者の中の主犯であって、建築関係者は共犯に過ぎないという、喜こぶべきか、憂慮すべきか、我々を戸惑わせるような弁護がある。しかし、この言葉から建築関係者に多くを期待しない。我々を見放した白い眼を感じるのは私だけであろうか……。

これらの問題が一挙に表層に浮かび上って来たのは最近である。しかし、これらの問題が出て来る要因は建築関係者の側に以前からあった。

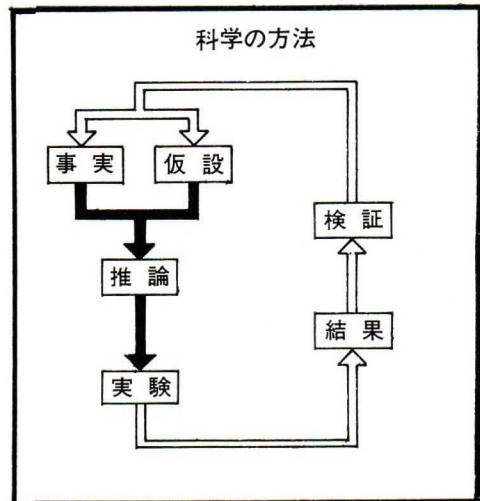
■行動の方法と科学の方法との関係

社会は動的であり、時々刻々と変化している。建築関係者も社会の一員であるから、彼等の行動もまた動的な変化しつつある社会の中で行なわれている訳である。社会が動的であり、時々刻々と変化しているという事は、社会のある瞬間の断面と、次の瞬間の断面とが異っている事を意味する。そして、この様な社会の中での建築関係者は行動に際して完全に同一な前例を持ち得ない。建築関係者の同一の前例を持ち得ない故に、彼等は機械的な行動、すなわち、同一の行動を繰り返す事は出来ない。それ故、彼等は行動の際に、まだ知られていない事実がありながら、何んらかの方法に依って行動を起さなければならぬ。

未知の部分がありながら行動を起し、これを明らかにしてゆく方法の一つに科学の方法がある。科学の方法では、既に知られている事実と仮説から推論を行ない、実験をし

て、その結果を判定し、検証する。そして、この最終段階は再び最初の段階へと立ち返る。

私は、科学の方法が建築の方法に完全に適用出来るとは思わない。また建築関係といつても、設計、施工、管理、その他多方面に渡るのであるから、建築関係の全ての人が科学の方法と同一の関わり方をしているとも思わない。し



かし、前述のように建築関係者の行動には同一の前例がない為、たとえ事実の認識の方法、仮説の立て方、実験装置の作り方、等が科学の方法と異っていても、彼等の行動は実験的行動の一部を含む。すなわち、彼等の行動の結果は観察と判定の過程を経て検証され、次の行動の為の既知の事実として最初の段階へと立ち返る。

■実験的行動の考察

全ての建築関係者の行動が含んでいる実験的行動をいま少し詳細に考察しよう。実験は実験的構想、構想からの推論、実験の工夫、実験装置の製作、実験の実施、結果の観察、判断、以上の七段階に分ける事が出来る。そしてここでも建築関係の全ての人が同一の関わり方をしてはいい。しかし、建築関係の全ての人が同一の関わり方をしていなくても全員が経なければならない過程として、結果の観察と判断がある。建築関係者の行動における実験は、積極的実験ではないので、実験の実施も、積極的、能動的、作為的、には行ない得ない。しかし、結果の、観察と判断の二段階が行なわれない場合、最初の段階へと立ち返るという、動的で連続的であるべき行動は切断される。そして、この切断された行動は、動的で連続的な社会から遊離する事は明らかである。

では、何故、この切断現象が建築関係者の中に生じたの

であろうか。それには三つの原因が考えられる。

第一には、建築関係者全体に思い違いがあるようである。すなわち、彼等は建築竣工をもって実験を終り、全てが終了したと考えている。第二は、建築設計者に顕著に見られる独善である。設計者の多くは、設計行為が実験行為の一部を含んでいる事を感じているようである。にもかかわらず、彼等のほとんどは完成直後の建物を自分で見る事、あるいは、同業者が見る事が結果の観察であると考えている。以上の二つは建築関係者の側の原因である。第三の原因是、社会の変化である。社会が現代のように、多様化、分化、巨大化、サイクルの短縮、という状態になる以前、社会の中での建築関係者の行動はいやおうなしに彼等に直接返って来た。人々は建物の設計者がだれかを知っていたらしく、施工者に対する評判は彼等の仕事の存在を左右しただろう。そして、この様な時代においては建築関係者は、結果の観察、判断を意識的に行なわなくてもよかつた。また、この様な事は、社会が未だ巨大化していない一部の国々では現在でもそうである。

しかし、意識していないという事は、積極的に結果の観察、判断をする為の基盤がなかった訳であるから、社会が多様化、分化、巨大化、サイクルの短縮という状態になり、積極的な結果の観察や判断行動が必要になった時、それは

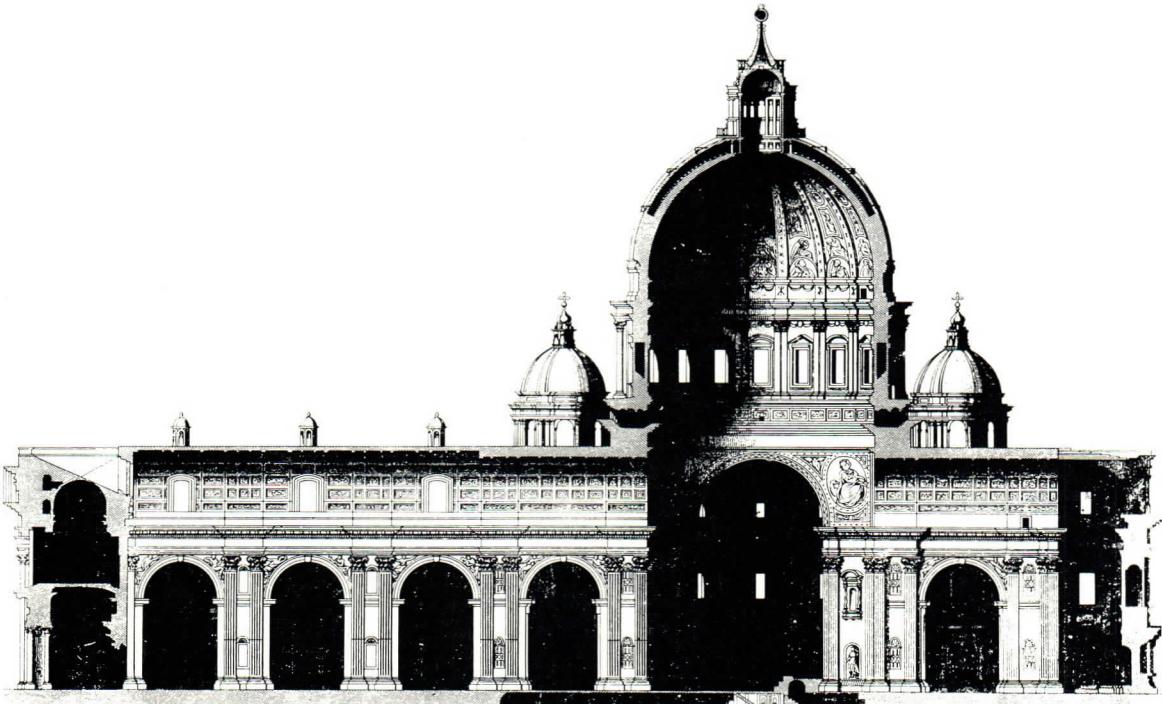
行なわれ得なかった。

■ 行動の結果に対する観察

建築関係者の行動の結果に対する観察と判断が行なわれなかった事が、社会との遊離の原因であり、それを正す為には、建築竣工が実験装置の製作完了の段階である事を認識し、また現代社会においては積極的に行動の結果の観察と判断を行なわなければならない事は、以上により明らかとなった。

積極的に行動の結果を観察する為のフィード・バックのチャネルには次の三つの経路がある。第一は施主と使用者が同一である場合、そこからのフィード・バックである。第二、第三は施主と使用者が異なる場合、あるいは部分的に共通している場合で、第二はそのうちの使用者から施主を経てのフィード・バックであり、第三は使用者からの直接のフィード・バックである。第一の例として住宅、第二の例として商業建築、第三の例として公共建築を考えいただければわかると思う。

建築関係者は自分の行動の結果がどのチャネルを経てフィード・バックされるかを考え、積極的に結果を観察し、そして適切な判断を下して、自分自身の行動を検証していただきたい。



執筆者のプロフィール

写真下は寝室の天井高と仕上材料を示す

黒沢秀行(くろさわ ひでゆき)

内井昭蔵氏に仕えて7年、こなした仕事は大変な数に及ぶ。高島平台地に入居の際は、集合住宅の設計者としての認識を深めるために敢えて西側の半日日照の悪条件を選んだという人。春にはいままでの労をねぎらって事務所から欧洲へ見学旅行の予定。



2,450M

コンクリート下地ウォールコート吹付

古山六男(ふるやま むつお)

高校時代から現在の片鱗をのぞかせていた逸材で、大学に通うかたわら石本建築事務所に勤めて12年のベテランである。卒業を待たれたかのように、以来福島から札幌迄永く滞在、やっと東京に帰って来た時には素敵なお嬢様も見つけてきた。青春の総決算がこの自邸にこめられている。春には愛児の誕生と、クールな男にしてはホットな話題が一杯の今日この頃である。



杉柾ペニア敷目張勾配天井

(いとう たかお)

(おおひら しょうこ)
(もりた としじ)
(かなざわ ひでお)
(あきづき あきら)

写真左より



安原治機(やすはら はるき)

大学院を卒業後、製図助手を経て、イギリスに1年間勉強のため滞在、帰国後武藤研究室の助手を務めている。本学建築学科にあっては特異な研究者で、欧洲見聞が彼のインデックスに加わり一層の活躍が期待されます。



2,350M

杉柾竿縁天井

愛川和伸(あいかわ かずのぶ)

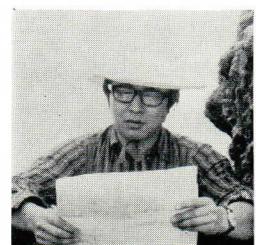
富士工業の取締役。学生時代は地下の材料実験室で実験補手を勤め、友人はいまだにそのイメージが拭うことができないと言う。しかし今の堂々たる風格はたよれる感じである。舞台設備の仕事は、鉄塊の大装置を動かすことに醍醐味があると語っている。(旧名・高朗)



2,250M 杉柾竿縁天井

大場光博(おおば みつひろ)

日本大学を卒業し、荻原研究室で学校建築について2年間ユニークな研究を重ね。大学院終了後再び日大に帰り、佐藤助教授の助手を務めている。沖縄にはふるさとを探しに行ったとか。此1月、素晴らしい奥様を迎えて、増々研究にも精が出ると期待されます。



2,350M

竿縁天井下地ハトロン紙張



文責:久野和作(くの わさく)



運営委員会報告

運営委員会記事

■ 第6年度事業報告

(昭和46年10月1日～昭和47年9月30日)

第26回運営委員会 昭和46年10月8日

1. 東京地区別懇談会報告
2. 第6回定期総会の件
3. 会誌4号編集の件

第6回定期総会 昭和46年11月7日

1. 第5年度事業報告及決算報告の承認の件
2. 第6年度事業計画及予算の承認の件
3. 会則変更の件

第27回運営委員会 昭和46年12月21日

1. 第6年度事業計画の件
2. 会誌4号の件
3. 会員研修援助の件

第28回運営委員会 昭和47年1月12日

1. 会誌4号編集の件
2. 大学評議員の選出の件
3. 学園同窓会関係報告の件

第29回運営委員会 昭和47年5月30日

1. カードシステムに於ける名簿作成の件
2. 会誌第5号の件及び第4号の報告
3. 学園同窓会関係報告

第30回運営委員会 昭和47年7月20日

1. 校友会との合併に関する準備委員の選出の件
2. 第7年度定期総会の件
3. 会誌第5号の件
4. 学園同窓会関係の報告

■ 第7年度事業計画

(昭和47年10月1日～昭和48年9月30日)

1. 同窓会誌第5号発刊
2. 厚生部会活動促進
ヨット部 夏季3ヶ月毎日曜日江の島で開催
その他同窓会の福利厚生に寄与するクラブ等は同窓会主催又は後援の形式を取って応援する。
3. 名簿発刊
カードシステムによる会員名簿の事務の合理化
新会員名簿作成
4. 本部活動
運営委員会 年4回以上

役員会 必要時

5. 正会員、準会員の援助
6. 校友会との関係改善、積極的に一本化を促進
7. 総会、講演会及び懇談会の開催

会計報告

■ 第6年度決算報告

(自昭和46年10月1日～至昭和47年9月30日)

歳入の部		
1) 会費等収入		2,679,165
準会員入会及会費	2,646,165	
正会員入会及会費	33,000	
2) 名簿代金		5,600
3) 預金利息		505,522
貸付信託利息	490,634	
普通預金利息	14,888	
4) 前年度学園同窓会 懇談会精算金		5,844
小計	3,196,131	
5) 前年度繰越金		9,359,869
合計		12,556,000

歳出の部		
1) 同窓会誌発刊費		873,265
印刷、製本	450,000	
編集、経費	100,950	
発送経費	322,315	
2) 各部会費		16,000
ヨット使用料	16,000	
3) 名簿発刊費		96,750
名簿印刷	95,000	
同送料	1,750	
4) 本部会費		72,625
会議費	14,270	
消耗品費	43,205	
通信・交通費	15,150	
5) 準会員援助金		67,272
学祭援助	50,000	
学生コンペ援助	17,272	
6) 事務員給料		220,000
7) 総会経費		119,350
通知状印刷	26,400	
同送料	46,710	
宛加書料	33,240	
懇親会経費	13,000	

8) 学園同窓会分担金		391,549	9) 予 備 費		150,000
47年度分担金	350,131		10) 積 立 金		210,000
会報分担金	33,750				
懇談金分担金	7,668				
9) 予 備 費		353,932			
学園同窓会関係援助金	18,750				
カードセレクター分担金					
	232,182				
正会員援助	103,000				
小計		2,210,743			
次年度繰越金		10,345,257			
合計		12,556,000			

■ 第7年度予算

(自昭和47年10月1日～至昭和48年9月30日)

歳 入 の 部		
1) 会費等収入		2,700,000
準会員入会金会費	2,650,000	
正会員入会金会費	50,000	
2) 名簿代金		10,000
3) 預金利息		20,000
4) 雑収入		50,000
合計		2,780,000

歳 出 の 部		
1) 同窓会費発刊費		1,000,000
印刷製本	500,000	
編集経費	100,000	
発送経費	400,000	
(注) 5,000部として		
2) 各部会費		50,000
3) 名簿発刊費		350,000
印刷製本	300,000	
諸経費	50,000	
4) 本部運営費		80,000
会議費	40,000	
消耗品費	20,000	
通信交通	20,000	
5) 準会員援助費		100,000
学祭援助	50,000	
コソペ援助	50,000	
6) 事務員給料		240,000
7) 総会運営費		150,000
通知状印刷	60,000	
準備経費	40,000	
懇親会	50,000	
(注) 講演会費用を含む		
8) 学園同窓会費		450,000

告 知 板

■ クラブ活動

○第1回 麻雀大会のお知らせ

麻雀好きの皆さんより、会員一同に会してお手合せしたいとの声が多数あり、次のように企画致しました、我と思わん者は、是非御参加下さい。

1. 日 時 昭和48年5月13日(日) AM 10:00～
2. 場 所 新宿西口榛葉ビル4F「大閣」
3. 参名料 1,000円 昼食付
4. 順位は勝点方式による

1位8点 2位5点 3位3点 4位1点
半チャーン1時間、5回戦のトータルによる。

5. 参加人員32名8卓
6. 組合せルール、賞、その他執行部一認
以上申込は日本都市建築設計事務所、清水迄
電話(376)2711

○ヨット部

期間：7月～9月、場所：江の島

セーリング希望者連絡先、日本都市建築設計事務所、電話(276)2711、金田昭治

■ 原稿募集

あなたの、体験を記録し、思考を整理してみませんか。会誌を充実させるのはあなたです。写真・表紙デザインもお待ちいたします。採用の際薄謝が呈されます。更に、編集部では、5号の御感想を待望いたしております。

■ 同窓会連絡先

新宿区西新宿1の24の2 工学院大学建築学科同窓会、電話(342)1211、製図教室

住所・勤務先の変更は学園同窓会事務室へハガキか電話で連絡下さい。

■ おわりに

原稿を書いて下さった方はもとより、会社リストに寄付を寄せて下さった方、又編集に当って、御指導・御協力下さった方々に深く感謝いたします。特に、園田邦彦・升谷昇・山本孝夫・金沢秀雄・大衡祥子各氏には御骨折りをいただきありがとうございました。

長い間、付いていなかった、会誌の愛称を龕(niche)と名付けました。御異存がなければ今後とも、ニッヂと呼びつづけて下さることを切に、希望いたします。